目　　　　次

巻頭言　豊田の里から　吉本知則（旧豊田町長）　2

シリーズ

二神氏ゆかりの地を訪ねて（第８回）下関市豊田町　豊田　渉　4

古文書の解説（第７回）足利尊氏の下文　二神浩三　14

系譜・家紋紹介（菊間二神氏）（№.７）　二神英臣　21

二神氏と苗字の歴史　編 集 部　27

特集①　太平洋戦争と二神氏

戦後60年特集を掲載するに当たって　二神英臣　29

～戦死・戦没者を偲ぶ

「吉木二神家と第二次世界大戦」　二神　弘　43

～苦難の引き揚げとその後

「牡丹江の二神一族顛末記」　二神照夫　51

「亡き父の故郷探訪、私の戦中、戦後の放浪記」　二神末次三　55

「菊間河之内集落と叔父辰雄の想い出」　二神昌生　63

～戦争体験

「キノコ雲と終戦」　二神浩三　66

特集②　豊田氏慰霊の五年祭

「二神氏のルーツを訪ねて」　二神種昭　73

「右折して先祖の地に入った」　二神大輔　79

「豊田種長追善供養祭に参加して」　二神博文　83

「二神系譜研究会との出会いから５年」　二神美知子　85

「豊田種治の関係文書について」　石野弥栄　88

研究・調査報告

二神氏と法楽連歌　二神栄三　93

役員のつぶやき

「還暦雑感」　二神俊一　100

「つれづれなる事、折の句に込めて」　二神重則　103

「由利島への想いから」　豊田　渉　105

「ふたがみ」にまつわる話

「むかし話し　由利千軒ゆり込んだ」　編 集 部　108

二神島の近況　豊田　渉　110

閑話３題　二神宏介　111

二神系譜研究会　会則　……　113

役員名簿　……　115

入会申込書　……　116

編集後記　……　117

巻頭言

豊田の里から

旧豊田町長　吉本　知則

今、我がふるさとは田植えも終わり薄緑色の苗が淡い光を放ち、豊田の里を元気付けてくれています。先日は「豊田氏慰霊五年祭」に二神系譜研究会会員の皆様が、先祖の地一ノ瀬にお越しいただき、懐かしい面々とお会いでき感謝した次第です。

先年、二神島訪問の際は、心温まるご歓待をいただき厚くお礼を申し上げます。

さて、今年２月13日に豊浦郡４町と下関市が合併し30万人の新市が誕生しました（10月１日付けで中核市に移行）。合併経緯の中で、全国でも課題であり住民の条件の１つでもある地名の問題が取り沙汰されておりましたが、合併条件で旧地名を残すことで合意されました。改めて、「下関市豊田町何何」となったということで、町民にとりましても安堵したところであります。二神一族にとりましても、ご安心のことと存じます。

６月に入りましても少雨傾向で、農家でも恵みの雨を期待しておりますが、連日の日照りでいらいらしている昨今であります。今月、豊田の里は世界一のゲンジボタルの乱舞が楽しめ、幻想的な世界へ誘う好季節でもあります。特に、一ノ瀬地区は豊田のホタル発生場所の中でも一番多く、観光のメッカとなっています。

一方、県内で豊田地域は、産業としては農林業中心ではありますが、同規模町村の中でも群を抜いて、行財政の安定と産業関連施設の充実、整備、環境、農林業政策でも他の追随を許さない程、民生安定上高い評価をいただいております。このことは、豊田氏が民のための政治手

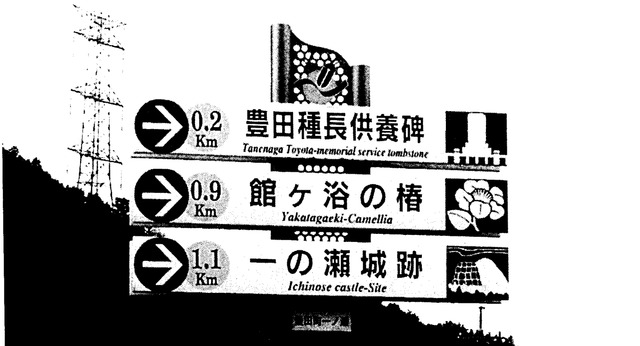
腕が現在まで引き継がれているものと確信しており、著名な人を世に送り出した土地柄でもあります。1、2紹介しますと、江戸時代に日本のシェークスピアと呼ばれた近松門左衛門。近代では、名女優田中絹代の生誕地であります。

不思議なことに豊田の里は歴史的に見て安住の地（私は、駆け込み寺のような安心して住める里ではと思っていますが。）であったことを物語っている事実がたくさん出てまいりました。豊田氏を崇拝し、先祖を大切に歴史を保有・伝承しようと固い結束の下に、老若男女が地域をあげて取り組んでいる「一ノ瀬地区」の皆様に最大の賛辞を贈る次第であります。

終わりに、会員の話の中にもありましたが、二神氏に関する文献も次々と解読され、その時代時代で強力な影響を与えてきた一族でもあります。現在も、二神系譜研究会を通して今日の二神氏の皆様が交流され、ご活躍されんことを祈念しております。

この会報が発行される８月頃、豊田の里は濃い緑色の稲が一斉に輝き、秋の黄金の稔りに向け爽やかに成長していることでしょう。先祖の地を豊かな地域にするため、一ノ瀬地区の皆様の連携を密にして頑張っていくことを約束しますと同時に、二神系譜研究会会員各位の益々のご発展とご活躍をお祈りいたします。そして、再会の日を楽しみにしております。

（旧山口県豊浦郡豊田町長）



二神氏ゆかりの地を訪ねて

豊田町（山口県下関市）

豊田　　渉

ご承知のように山口県豊田町は、二神氏のご先祖の地である。豊田町の一ノ瀬地区では、今も５年ごとに仏式と神式交互に供養祭が行われている。

平成17年４月10日午前11時から、一ノ瀬の薬師堂で「豊田氏追善供養五年祭」が行われた。今回、二神系譜研究会から二神浩三会長以下10名が参加した。

この２ヶ月前、豊田町は、下関市・菊川町・豊浦町・豊北町との合併により、平成17年２月13日から「下関市豊田町」になった。

今号では、豊田町および五年祭のことを中心に紹介していきたい。まずは、豊田町の歴史について触れ、後半部では、今回訪ねた「一ノ瀬地区」について記したい。

豊田郷の成立

大津郡は大化の改新前は阿武の国に属していたが、改新後は阿武国が長門国に編入されたので、大津郡は長門国の１郡となった。

この大津郡のうち、堂ヶ岳、一位ケ岳、天井ケ岳、ザレ山の山稜と、その南側の豊ケ岳、華山、狗留孫山の山稜との間に「豊田郡」が成立した。

その豊田郡内の東部は木屋川の中流域で、豊田御地を形成し、その盆地は稲見郷の本拠でもあった。また、粟野川は木屋川との分水界を源流とし、西北方に平野を造成し、粟野で大津（油谷湾）に流入する。この「大津」が「大津郡」の郡名となった。

大化の改新後、白雉年代（650－655）頃には、豊田盆地の中村・殿

敷の全域に班田収授制の条理区画ができた。その条理の１区画は１町（109m）である。

豊田町の歴史と沿革

豊田町は、平安時代の中頃から南北朝の中頃まで長門の豪族豊田氏の領するところであった。

豊田氏は藤原氏の出といわれ、初代輔長が豊田郷の領主として、この地に下向して豊田盆地の南東山中の一ノ瀬に居館を構えて勢力を張った。

室町時代に大内氏に対して円満に臣従して、旧領地の一部を安堵されて大内氏重臣の地位を確保した。

大内氏が滅び、毛利氏が防長の太守となった。これより豊田郷は萩本藩と長府支藩の支配するところとなった。すなわち、殿居村、殿敷村、地吉村が萩本藩で、その他が長府藩であった。

明治６年12月１日、新たに区制を布き、官選戸長を置いて支配した。明治11年戸籍法の戸長役場をおいて仕事を始めた。

明治22年５月町村制発布とともに、行政区画が整理統合されて、豊田上村（殿居村）豊田中村、豊田奥村（西市町）、豊田下村になった。その後も、変遷があり昭和28年９月１日町村合併促進法の施行により、豊田郷も合併の気運が高まり、昭和29年10月１日殿居村、豊田中村、西市町、豊田下村の四ヶ町村が合併して「豊田町」として発足。そして、今年、同郡の３町とともに下関市と合併した。

豊田氏のおこり

豊田氏の直系の系図は不明である。現在、豊田氏の系図となっているものは、第15代種世の弟種家が兄と相続を争い、種家は流浪の身となり落ち着いたのが伊予の二神島（現愛媛県松山市二神）で、二神氏を名乗っている。この系図による外にたどる術が無い。

豊田氏は、関白藤原道隆の出である。道隆は、長徳元年（995）に

42歳で逝去。その子息たちは関白の地位には就けず、嫡流でありながら氏の長者から離れた。（道隆の弟道長がこれに代わった）道隆の嫡男隆家は太宰大式となり太宰府に下った。寛仁３年（1091）未４月18日、刀伊賊の侵冠があり、隆家の嫡男経輔大納言（14歳）が父隆家の戦捷祈願を華山神上山で行った。（神上山縁起より）

刀伊・・中国北部の民族で、後に清国を開いた。賊徒50余艘が突然、壱岐・対馬を襲い博多を侵した。

神上山・・現在の華山（730m）である。古くから霊山として崇められている。

経輔の第２子長房は27歳の時、天喜３年（1055）２月３日周防介に任じられた。11年後の治歴２年（1066）２月８日から４年間（37歳～41歳）周防権守に赴任した。それから18年後の応徳元年（1084）正月29日、長房57歳で再び４年間周防権守となる。さらに嘉保元年(1094)に太宰大式に任じられている。康和元年（1099）９月２日71歳で没した。長房の子輔長が豊田氏を名乗り、豊田氏の初代となる。

系図の２代輔平の記事に「築地ト号ス」とある。これは、屋根を葺いた土塀を囲らした豪族の邸宅のことである。輔平は一ノ瀬に築地を構えて定住し、自ら「築地」と称したようである。白河天皇の御代末期（応徳年代）頃の「神上山縁起」によると「輔長卿子息大和国ノ大路堂ノ聖観音ヲ以テ当山ニ安置ス」とある。(聖観音は現存している。)このことは、祖先経輔の参拝した神上山に定住安泰を祈願して聖観音を安置したものであろう。

以上のように、平安中期に土着した豊田氏は「奈良原」という地名を大和国から移し、奈良県桜井市初瀬の豊山神楽院長谷寺から初瀬という地名を日野に移し、長谷観音に模した観音堂を創建した。また京都市の清水町の音羽山清水寺からも清水という地名と観音堂を高山に創建しているし、一ノ瀬には祇園社を創建している。一ノ瀬の居館に近いこれらは古い時代のもので、定住して間もなく都を偲んで残した史跡である。

源平合戦（壇ノ浦の海戦）と７代種弘

源義経は安徳天皇と宝剣を大捜査し、ついに天皇の御遺骸を見つけ、豊田郷地吉に葬ったという。当時の豊田種弘は源氏に味方をしたので、中世武将として長く西国に重きをなした。

豊田氏は領内の民心を安んずるため、その信仰する八幡宮を要所要所に創建した。

(1)	東八幡宮	種弘が文治３年（1187）３月、豊田盆地の東側、殿敷の田園の中に建立。宇佐から勧請した。
(2)	西八幡宮	種弘が建久２年（1191）に阿座上の地に建立。同じく宇佐から勧請した。明暦２年（1656）現在地に遷された。
(3)	島戸八幡宮	種弘が建久２年に島戸の馬城山に創建した。
(4)	八道八幡宮	８代種隆が建仁２年（1204）７月23日に建立。

元軍の来襲と11代種貞

文永11年（1274）、弘安４年（1275）に元軍が九州に押し寄せた。この時、周防の大内氏、長門の厚東氏・豊田氏その他の豪族が一斉に出陣し勇戦した。豊田種貞も総大将として華々しく活躍した。種貞は元軍との戦いの反省から、防禦設備として、山上に城塁を築くことが大切であるとして一ノ瀬の山砦を堅固にして山城の修築をした。

日野集落の長谷観音は、種貞が大和の長谷寺に模して建立したと伝えられる。長願寺は豊田氏の菩提寺であるが、種貞の守り本尊の薬師如来像が安置されている。

豊田氏は、大内氏、厚東氏と共に防長の三大豪族となった。

国乱と12代種長・13代種藤

元弘元年（1331）後醍醐天皇が倒幕の軍を起こした時は、種長・種藤は厚東氏と共に長門探題北条時直に従って官軍と戦ったが、後に豊田氏は官軍に属し建武の中興に功績をたてた。

後醍醐天皇の新政の後、足利尊氏が天皇に叛いて新帝「光明院」をたてた。これを北朝という。そのために、後醍醐天皇は吉野に遷幸した。これを南朝という。ここに全国の武将は、南北朝に分かれて対立。豊田氏は南朝方について大内氏と共に厚東氏に対立した。

足利尊氏の次男直冬は、父と仲たがいをして九州に走った。尊氏に対抗するため南朝方に味方して、北朝方の大友氏らと戦ったが敗れて長門国の豊田種藤を頼って一ノ瀬に潜んでいた（観応3年11月13日）。翌年、神上山で戦勝祈願をする。

観応3年（1352）10月18日に種長死す。遺骸は長願寺に埋葬。この時、重臣が殉死したという。近くに殉死の場所「朱満ヶ原」と重臣の墓所と伝えられる「千人塚」がある。長願寺には種長の供養板碑が建てられている。巨大な板碑の中央にキリーク（弥陀）、カーンマーン（不動）の2字が梵字で刻まれ、右上に種長御霊、左下に観応3年10月18日とある。下方に数行の文字の跡と「大施主良祐」の字が見える。

種藤は厚東氏が衰えたので、新たに豊田盆地の北部に長正寺城を築いた。豊田氏の居館は長正寺城の東方殿敷集落の向山に設け西館と称した。これに対して、館の後ろの山を越した所に東館を設けて、種藤の側室の子種治が住んだ。

豊田氏の家督争い

種藤の子14代種秀にははじめ実子がなかったので種世を養子としたが、後に実子種家が生まれた。種秀の死後、種世と種家とが家督を争ったが、種家が豊田郷を去った。種家は伊予国二神島に移り「二神氏」を称した。

二神氏は、河野通直に従い、宮方として各地に転戦して功績があった。種家の後、種直の代に二神氏は風早郡小川村宅並城主となり、子孫連綿として現在にいたっている。

豊田氏大内氏に服従する。

厚東氏が正平23年（1368）のころ滅亡して、長門の形勢が定まったので、豊田氏は大内氏に降伏して円満に旧領地の授受が終わり、豊富な旧領地の一部を安堵され優遇された。豊田氏が大内氏に降ったのは、おそらく14代種秀、庶流は初代種治であろう。

応仁の乱が終わって９年後の文明18年（1486）に庶流東殿と思われる、豊田入道元秀が大内政弘から一ノ瀬50石の地を宛てがわれている一ノ瀬の豊田氏館跡の東に「オビイ屋敷」と称する雑草地がある。ここに館紅白混じりの八重椿の大樹がある500～600年は経っている。館ケ浴椿と言っている。おびい屋敷は、ここにお堂があったと思われる。

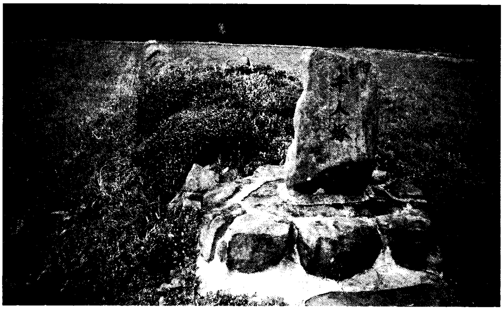
日輪寺と豊田氏の滅亡

正平18（1363）年、24代大内弘世が東八幡宮参道の東方に日輪寺を建立し、八幡宮に25石を寄進した。天文23年（1554）失火により、日輪寺が全焼。翌弘治元年に大内義長が日輪寺の焼失を激しく叱責し、豊浦奉行豊田房種の恥を取り上げた。弘治２年（1556）４月、20代豊田房種は自殺して、豊田氏は滅亡した。

一ノ瀬地区をはじめ、今回訪ねた場所の紹介をする。紙面の都合上全てを紹介できないが、これは今後に委ねる。

朱満ケ原と千人塚

種長供養板碑の100m前方の田の中に、石を積み重ねたような塚がある。これは千人塚と呼ばれ、種長に殉死した人を埋葬したところといわれている。殉死の場所はさらに前方の川向こうの河原で、朱



千　人　塚

満ケ原といわれる。自刃した人たちの血で、一面朱色に満ちたということからこの地名がある。

長願寺跡

種長の供養板碑の右にある薬師堂より右側の一帯が、長願寺の跡地である。長願寺は豊田氏の菩提寺で、薬師堂には本尊と伝わる薬師如来坐像が安置されている。

長願寺は元真言宗で、豊田氏の衰退により廃寺となった。享保の頃（1716－35）再建して真宗となったが、明治になって廃寺となった。薬師堂は大正の終わり頃の再建で、薬師像のほか、観音像、大師像、不動明王も合祀してある。

豊田種長追善供養板碑

豊田氏の全盛は11代種貞、12代種長のころである。鎌倉時代の建武の中興から南北朝頃で、防長では大内、厚東、豊田の豪族がしのぎを削っていた時期である。観応３年（1352）種長が死去し、遺骸は長願寺に埋葬され、後に供養板碑が建てられた。

豊田氏の館跡

豊田氏２代輔平、３代輔行などが一ノ瀬に定住し、豊田郡司となった。居館のあった「広畠」は城山の東側麓の丘陵地で、すぐ上の山谷を「館ケ浴」といい、隣地を「オビイ屋敷」といった。そこは屋敷跡で椿の大樹のほかに葉蘭南天などもあったといわれる。今は埋められているが、古井戸も３ヶ所あったらしい。「オビイ屋敷」の上の山地には祇園堂の石祠も残っており、一ノ瀬地区では祇園様といって毎年７月17日を縁日として全家庭がお参りをしている。

館ケ浴の椿

椿は古くから霊力を持つ神秘の樹木として信仰の対象であった。

「館ケ浴」の椿は園芸品種の八重椿で、樹高、樹幅とも約10mで樹囲２ｍ近くあり、４月には紅白入り混じって咲き乱れる。豊田氏第12代種長の時代か、それ以前に植樹され、樹齢は600年以上と推定される。

館 ケ 浴 の 椿

西八幡宮

西八幡宮が遷座されるはるか以前に、神功皇后が来臨されたとのいわれで、伊邪那美之命を主祭神として事解之男命と速玉之男命とを陏神とする３柱が祭られる。この社に宝 亀７年（776）３月６日、長門国司多治比真人三上が参拝し、天皇より授かった宝冠を埋納したという。

文明15年（1483）諏訪ケ原の城主、朝倉（右田）弘詮が後山を城山とし、その鎮守として京都今熊野神社を勧請した。今熊神社を熊野神社に並べて鎮座したので、再び地名も「今熊」と改められた。

明暦２年（1656）３月24日、465年間鎮座されていた谷山から分かれて、この今熊の地に遷座された。古代宝冠を埋納した熊野神社を合祀「宝冠社」とも称された。

明治政府の神社統合の指示により、明治43年（1910）に庭田の菅原神社、大正３年（1914）に大河内の河内神社、また、本社に並んで在った今熊野神社祭など、すべて本殿に相殿神となる。

大正８年（1919）10月13日、拝殿・幣殿・祝詞殿・神饌所等再建さ

れた。

祭神　正座応神天皇　左座神功皇后　右座仲哀天皇　御神体の銘には、

　　敬白　御正体銘書留事

　　建久弐年歳次　晩春　支干丙辰

　　為息災延命無病安穏泰平矣

　　豊田郷司藤原種弘　生年五十二造之

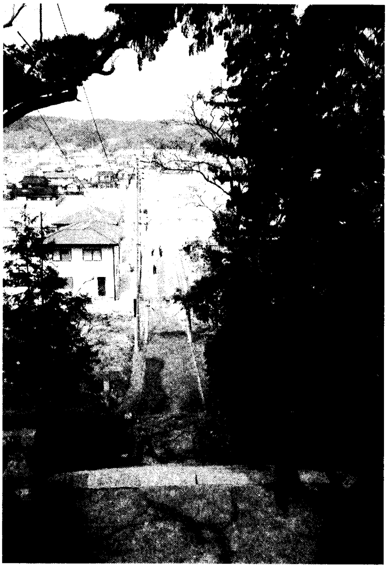
と、この裏書は豊田町最古の文献で、山口県でも他に類例のない貴重なものである。また、神殿前には「宝冠社」の額も掲げてある。額には、

　　「宝冠社　従三位　貞随　印」とある。

東八幡宮

若宮八幡宮より3条里（327m）を隔てた上の1区画（109m）を「八幡山」といい八幡宮のあった地である。文治3年（1187）3月15日、豊田氏（種弘か）が宇佐より勧請し、中山から地吉にいたる川東の総氏神となった。

大内弘世が長門国の守護になると、向山の豊田種藤と和談が成り、正平18年（1363）3月、八幡と若宮の中間の1区画（109m）に、神上寺の末寺の社坊「東光山日輪寺」を建立し、これに神社の宝物を納め、社僧を定め神社・社坊の万端を司った。


東八幡宮から一直線上にある西八幡宮を見る

天文13年（1554）9月16日、若宮に御神幸中失火を起こし、日輪寺は焼滅した。

明和元年（1764）9月16日、御神幸中また失火、八幡宮本殿が全焼した。次いで、明和7年（1770）長府藩の指示により、稲光支配8ケ

村は東長野若宮八幡宮を氏神として、東八幡宮から分かれた。

明治21年（1888）10月20日、八幡山より東南方の産地に遷座されて、地元から殿敷・市ノ瀬・中ノ川・保々・今山の総氏神として現在に至る。

終わりに

月日の経つのは本当に早いもの。あっと言う間の５年間でもあった。しかし、この５年間で、二神系譜研究会の活動も大きく変化し、いろんな発見があった。なかなかきちんと解明するところまでにはいたっていないし、はがゆい思いもする。一朝一夕には、わからない事のほうが多いが、地道に続けていくことの大切さを感じる。

今回の特集で、豊田町のことを十分には紹介できていないように思うが、今後につなげていければと思っている。

５年ぶりに「里帰り」した豊田町行き。５年前と変わらない顔で出迎えてくれた。二神島に来て何百年と時は流れたが、一ノ瀬の郷はその姿をずっと保ってきたのだろうと思う。本当のことを知っているのは、一ノ瀬の山や川や田畑であるのだろうが語ってはくれない。今回の五年祭に参加して、一ノ瀬に話をしに行く機会を多く持たねばならないと強く感じた。

参考資料

「歴史と文化」（豊田町教育委員会発行）

連載　二神古文書の解説　第７回

会長　二神　浩三

足利尊氏の下文

西条市丹原町にある綾延神社の元宮司豊田栄年氏が所蔵されていた足利尊氏の豊田種治宛て下文（くだしぶみ）を調査したことは、既に平成13年11月10日発行の二神系譜研究会速報No.８に掲載してきました。豊田町には、豊田氏の残した古文書類が極めて少ない現状に即して、豊田種治への尊氏の花押のある下文が見つかったと云う速報は、豊田町の方々にとって近来にない朗報として伝えられました。しかも、西殿の種家が出ていった先である伊予の国から見つかったこともあり、豊田と伊予の絆がより強固なものにもなりました。

同じような下文が片山二神文書並びに豊後森の林家に残る文書にもありますが、花押のないものであり、それだけに花押のある下文は貴重なものと考えられます。

ここで、豊田種治と云う人物について、豊田町の教育委員会に存在する資料から解説して見ることにします。

①　豊田氏における種治の存在

「目で見るふるさと豊田の歴史と文化」（豊田町教育委員会発行）の豊田氏略系図と伊予史料集成刊行会発行の景浦　勉編「大山積神社関係文書　改訂版」に掲載されている二神氏略系譜とを私が繋ぎ合わせた豊田・二神略系譜を下欄に示しています。

このように種治は豊田13代種藤の子となっていますが、注記によれば「雖為嫡子落胤之故、不継惣領」（本妻の子ではありますが、私生児のため総領を継がなかった。）とあります。鎌倉末期に、殿敷向山（とのしきむかえやま）へ分立し、これを東殿（ひがしどの）と称するようになりました。二神（初代）種家の叔父に当たる人物です。

豊田・二神略系譜

藤原道隆――隆家――経輔――長房（豊田輔長）［豊田初代］――輔平［2代］――輔行［3代］

――輔継［4代］――種継［5代］――輔継［6代］――種弘［7代］――種隆［8代］――種綱［9代］――種氏［10代］――種貞［11代］

――**種長**［12代］――種藤［13代］――**種秀**［14代］――**種世**［15代］――儀種［16代］――弘種［17代］――興種［18代］――種貞［19代］――房種（滅亡）［20代］

種長――種本

種秀――**種家**（**二神氏初代**）

種藤――（**東殿**）**種治**――種直――義種

種家――吉種［2代］――種直（宅並城主）［3代］――家直［4代］――家真

4代以降1～2代を欠いているかも知れない

――種――通範――通種――家種――種長――種忠――種次――

通範――種範（風早二神氏）――

また、前掲の「目で見るふるさと豊田の歴史と文化」に掲載されている豊田氏略年表から、豊田氏の歴史の中での種治の活動の跡を追って見ることにします。

豊田氏略年表（抜粋）

時代	西暦(和暦)	
平安時代	979(天元２)	藤原隆家、道隆の第４子として生まれる。
	990(正暦元)	道隆、関白となる。
	1029(長元２)	豊田氏の祖　藤原長房、経輔の第２子として生まれる。
	1054(天喜２)	長房、周防介となり赴任する。
	1084(応徳元)	長房、再び周防権守となる。
	1084～86(応徳３)	豊田氏２代大和守輔平３代輔行（長房嫡男）定住する。
	1167(仁安２)	７代種弘、豊田郡大領（郡司）となる。
鎌倉時代	1281(弘安４)	元軍来襲、大内氏・厚東氏とともに11代種貞防戦に当たる。
	1302(正安４)	**種治**、14代種秀の時、向山より御幣司へ分立する。(東殿)
南北朝時代	1333(元弘３)	種藤、種本、種長ら、長門探題方として天皇方と戦う。(伊予星ノ岡の戦い) その後逆に天皇方につき、探題方を攻める。
	1336(延元元)	**種治**、足利尊氏・直義に従い京都に転戦する。
	1337(延元２)	**足利尊氏、種治に越前国主計保(カズエノホ)半分を与える。**
	1352(正平７)	**種治**、向津具庄（ムカツグノショウ）の新日吉（シンヒエ）神社の社領を度々掠奪する。 12代種長、一ノ瀬で自決する。 足利直冬、九州を追われ種藤を頼り豊田氏館に潜む。

時代	西暦(和暦)	
南北朝時代	1365(正平20)	**種治、新日吉社領掠奪のため豊前宇佐に流される。**
	南北中期以降か？	15代種世の弟　**種家、相続争いに敗れ二神島（愛媛県）に逃れる。**
戦国時代	1553(天文22)	東八幡宮の社坊　東光山日輪寺が秋の大祭の時に全焼する。
	1555(弘治元)	大内義長、日輪寺焼失を責め20代房種を追放する。
	1556(弘治２)	房種自決し、豊田における豊田氏亡ぶ。

この年表で見ると、種治と云う人物は豊田氏の中でも可成積極的で、活発な人物と見受けられる。越前国主計保半分を与えられたり、没収されたりする経緯については、石野先生のご研究の項にお願いすることにして、ここでは、この種治と綾延神社との関係について、触れて見ることにします。

南北朝時代に、種治は新日吉神社の社領を掠奪した廉により、豊前宇佐に流されたようです。豊前宇佐には、宇佐八幡宮がありますが、宇佐に流されたと云うことを直ちに宇佐八幡宮に行ったとすることには、少し抵抗を感じざるを得ません。しかし、八幡信仰の厚かった豊田氏のことを考えれば、種治が宇佐八幡神社に帰依していたかも知れない。宇佐八幡神社に残された古文書の中にでも手掛かりになるものが見つかる可能性に一縷の望みを託しながら、今後の研究の成果に期待したいと思います。

種治が宇佐に流されてからの消息は不明のままでしたが、愛媛県周桑郡北田野（現在、西条市丹原町）に在る綾延神社の元宮司豊田栄年氏の所蔵する足利尊氏から種治に宛てた下文（クダシブミ）の存在が確認されてから、急遽我が会での調査が2001年に始められ、ここで、

種治の名に巡り合った次第です。

境内に入り、先ず目にするのは、大きな花崗岩の石碑で、次のような碑文が刻まれています。

「綾延神社旧社家豊田家顕彰碑

綾延神社旧社家豊田氏ハ藤原姓ニテ修理亮種治ヲ祖トシ建武四年（1337）越前国主計保（カズエノホ）ヲ宛行ワレ、後ニ当社神主職ヲ務メ併セテ田野郷内ノ諸神社ヲ統括ス　爾来六百有余年、二十一代栄年氏ニ至リ平成三年（1991）七月ソノ職ヲ辞ス　依テ郷内六千石ノ氏子一同ハ豊田家ノ永年ニ亘ル徳ヲ顕彰シ、茲ニ石碑ヲ建立シテソノ筋目ヲ誌シ後世ニ伝ヘルコトトスル

豊田家筋目

修理亮種治　主水正義實　大工頭義正　宮内頭義忠　中務丞義信
佐衛門信元　幸太夫信親　出雲守義理　伊勢守義光　左近介義秀
美濃守義勝　伊豆守義治　大蔵介義総　近江守義堅　土佐守義辰
式部丞義男　摂津守義国　陸奥守義秋　義央　栄楼
栄年

平成四年（1992）十月吉日建之　氏子中　篁堂渡部盛幹謹書」

確かにこの豊田筋目の祖は種治となっているものの、豊田郷で新日吉神社領を掠奪し、宇佐に流罪となった種治を綾延神社が果たして神職に迎えたであろうか？　また、宇佐から何故伊予国の北田野に移り住んだのか？　豊田・二神略系図から見ると、種治　種直　義種と、何れも種を通字としているのに対して、豊田家筋目では種治以外に種を用いた人はいない。何れも甚だ疑問ではあるが、これらの事柄を誤りだとする証拠は何一つないのが実情である。

更に、綾延神社の沿革について、次の碑文が残されている。

「**綾延神社沿革略記**

当社ハ田野郷総本社ニシテ霊亀二年(716)八月二十八日　綾延姫ノ墓側ニ祠ヲ建テテ其霊ヲ祭リ墓辺社ト称ス　其後延久五年(1073)八月十五日　源頼義　豊前宇佐宮ヨリ八幡宮ヲ勧請シテ合祀ス　依テ墓辺社並二八幡宮ト称シ　其後綾延八幡宮ト号セシガ明治二年(1869)十月綾延八幡大社ト改称シ同十二年(1879)九月　終ニ綾延神社ノ名ニ改ム　慶安二年(1649)ヨリ明治維新(1868)ニ至ル迄　世世松山藩主　久松家ノ崇敬浅カラズ　明治四年(1871)郷社ニ列シ同十五年(1882)県社ニ昇格シ現今　田野　中川　石根ノ三か村に亘レル千有余戸ノ総産土神トシテ民庶ノ尊信太ク厚ク神徳益顕著ナリトス

大正九年(1920)十月　　社司　豊田　栄楼　撰文
　　　　　　　　　　　願主　志賀喜三郎　建立」

この碑文から見ると、種治がこの神社に来た時には源頼義が豊前の宇佐宮から八幡宮を勧請してからのことで、種治が宇佐神宮にいたとすれば、綾延神社へ来たことは、それほど不思議な事でもないように思われますが、しかし、種治は豊田郷から宇佐に流されたものであり、格式の高い宇佐八幡宮が受け入れたのであろうか？　疑問は残るものの、当時の流されると云うことが、今日の流罪と云う感覚とは異なるものであったのかも知れません。

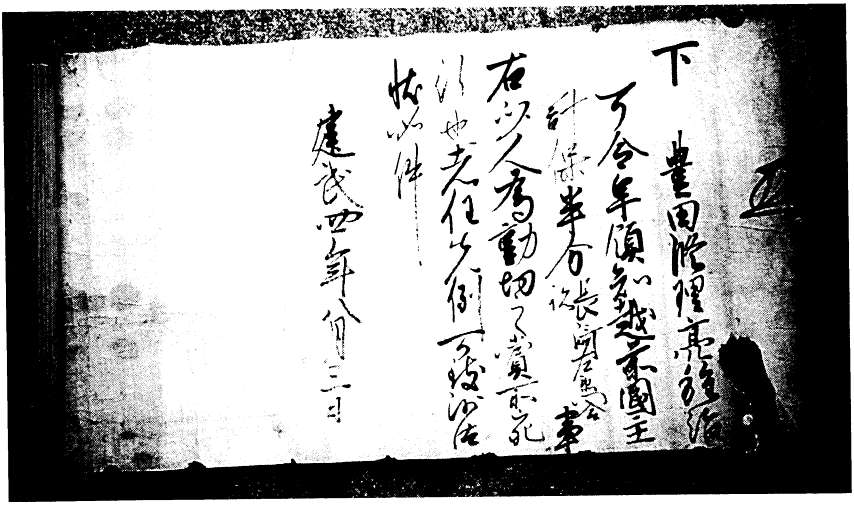
所で、肝心の足利尊氏の下文について、石野弥栄さんに解読して頂いたので、写真とともにその読み方を記します。

右祖に尊氏の花押

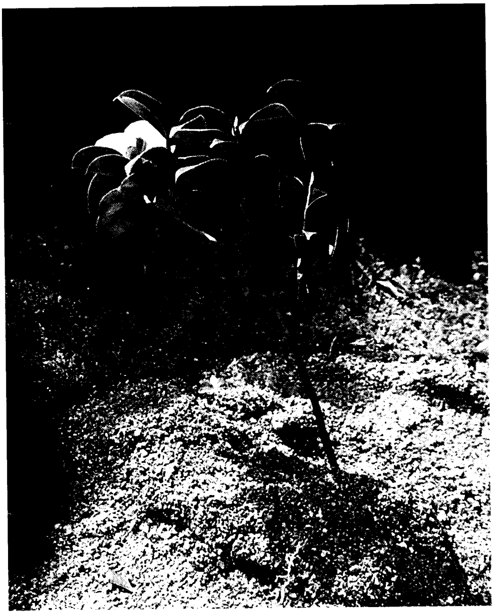
くだす　とよだしゅりのすけたねはる

はやく　えちぜんのくに　かずえのほ　はんぶん（ながさき　さえもんにゅうどうのあと）をりょうちせしむべきこと

みぎをもって　くんこうのしょうとして　あておこなう（あてがう）ところなり。せんれいにまかせ　さたいたすべきのじょう、くだんのごとし。


下　豊田修理亮[illegible]
[illegible]
建武四年八月三日

花押のある下文（くだしぶみ）の写真



館ケ浴の椿の孫椿（松山市樽味へ移植）

系譜・家紋紹介

No..7　事務局長・二神　英臣

菊間（きくま）二神氏

1．はじめに

今回、系譜特集として菊間二神氏を取り上げた理由は、二神系譜研究会の発足前の1998年（平成10年）９月に菊間二神氏宗家の御当主、二神武信氏（当時83歳）から会の発足準備を進めていた事務局へ一本の電話が入り「菊間に住む二神と申しますが、二神氏の事を知りたいのですが………」との問い合わせがありました。その後、会の顧問の福川先生と風早歴史文化研究会の竹田先生（現会長）が菊間の真言宗遍照院文書の調査に併せて、菊間二神氏のご先祖墓の調査を、二神武信氏と甥の二神昌生氏（現理事）の案内で菊間町の最奥の集落河之内を訪ねました。しかし、この時点では二神氏に関する情報と全体像に対する認識は極めて乏しく、菊間二神氏のご先祖墓を発見したものの、調査を進めるまでに至らず、今日までそのままになっておりました。昨年夏から、秋にかけて四国地方を襲った台風による被害は、山間部では予想をはるかに上回る規模で破壊が進行しており、菊間町の最奥の集落河之内の山中にある菊間二神氏のご先祖墓のことが脳裏から離れませんでした。「もし山が崩れていれば墓石など一塊りもなく流されてしまうに違いない。そうなれば折角確認されている菊間二神氏のご先祖墓の調査が出来なくなる恐れがあり、今後調査しようにも出来ない事

菊間二神氏の氏神様素鵞神社

態が発生する可能性が考えられる。など、様々な観点から検討した結果、この時期を外しては菊間二神氏を世に紹介する機会は失われるのではないかとの判断から第１回常任理事会で提案し、その承認をうけて今回の取り組みとなったものです。

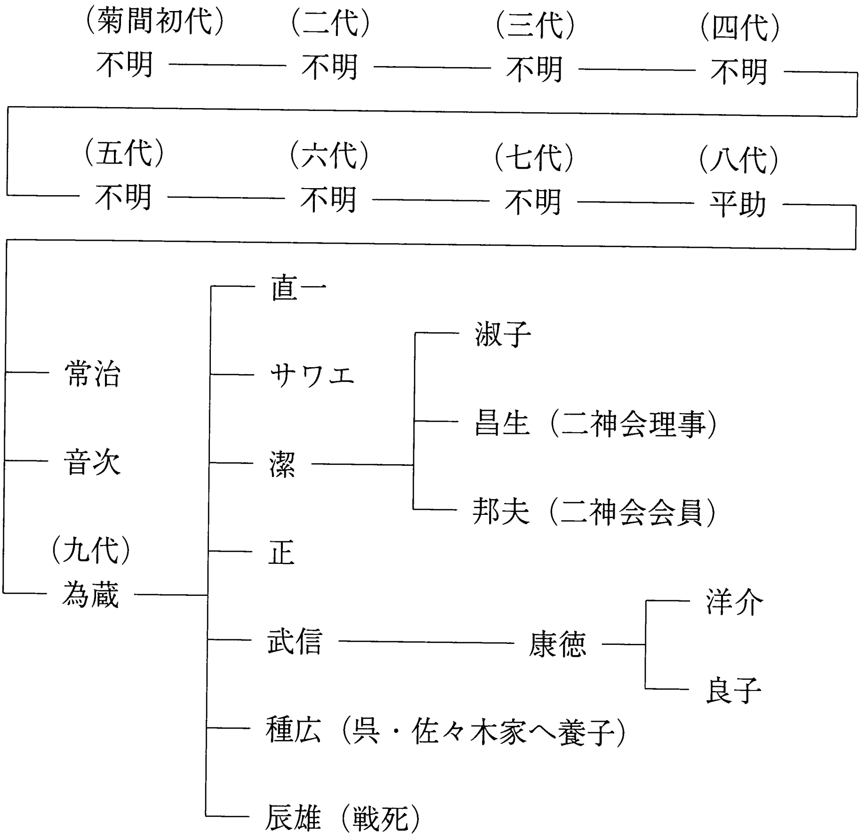
2．菊間二神氏宗家系譜

菊間二神氏宗家に残る位牌の中で最古のものは、正徳５年（1715）３月２日に没した、道喜信士で、次ぎに天明７年（1787）11月７日没の観山秋音信女、続いて享和２年（1802）３月28日没の晩應道春信士、文化元年（1804）７月20日没の観心禅門、文久元年（1861）８月28日没の寛光妙雲信女の五霊が江戸時代に没しています。しかし、正徳５年から文久元年までの約150年間で五霊のみしか、ご先祖の位牌が存在していないというのも不自然です。菊間二神氏の菩提寺は真言宗豊山派、松尾山常光寺ですから菩提寺に残る過去帳と、菊間二神氏宗家に残る位牌との照合が不可欠です。

菊間二神氏の先祖は、天正13年７月秀吉の命を受けて伊予国へ攻め入った小早川隆景の軍勢に高穴城で敗れ、山深い菊間の最奥地、河之内に住み着いた二神氏の一族と伝えられています。豊臣方の攻撃に対して、高穴城で宇佐美、目見田、尾越の各氏と共に城を守った二神一族が、小早川隆景自らの一気攻めにより城内は防戦一方となり、適わないと見た二神氏をはじめとする河野氏の軍勢は逃亡するに及び、高縄山系の奥深く各氏ともちりぢりとなって逃げ落ちたと伝えられています。ただ、河野氏は小早川隆景の軍勢に徹底抗戦をしたわけではなく、湯築城に拠る河野通直に対し親書を送り、恭順をすすめ、河野通直もこれを受け入れたため比較的穏やかに河野氏配下の各城は明け渡されたが、二神一族などが拠った高穴城では激戦となり、最後は逃亡したものの、約百余人の戦死者が河野氏側に発生しました。この時二神一族から何人の戦死者が出たのかについては記録が残っていませんが、皆無であったとは考えられません。

菊間二神氏の系譜は今日では全国に拡がっていますが、今治市菊間町やその周辺で宗家一族は発展を続けています。

【菊間二神氏宗家略系図】



＊　菊間二神氏宗家略系図は二神昌生理事が二神武信氏から聞いた内容を基に作成しました。

なお、菊間二神氏の菩提寺常光寺の過去帳、位牌、墓石との照合作業は、一部を除いて殆どなされていません。また、近世の除籍謄本や改正原戸籍などとの照合をしたものでもありません。

3．菊間二神氏墓地

菊間二神氏の最古のご先祖墓地は宗家の系譜である、今治市菊間町河之内二神武信氏の屋敷より山の奥へ１㎞ばかり登り、今では廃墟となった十数軒の河之内集落の通称盆の奥と呼ばれる左手の小高い山の瀬の松の木の近くにあります。この墓地の存在を二神武信氏が知ったのは比較的に新しく、二、三十年前に、二神アキノさん（88歳）から「河之内の奥に先祖墓があるが、二神氏の中でお参りに行きよるのは私一人だけだ………」との話しがありました。実は二神武信氏も子供の頃に祖父に連れられて先祖墓へ初めて行ったことは覚えていましたが、それ以後は行ったことがありませんでした。1998年（平成10年）９月に顧問の福川先生達を案内していったのは２回目のことでした。

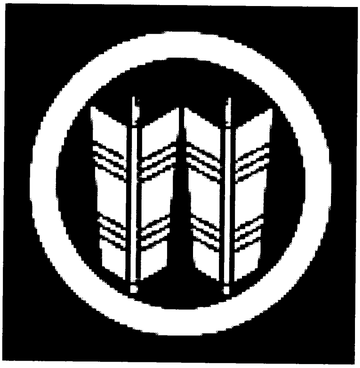
2005年６月９日、私は菊間二神氏の最古のご先祖墓地再調査のため、７年前にここを訪ねたことがある竹田覚風早歴史文化研究会会長を伴って、今治市菊間町河之内（今年より今治市に合併）の山奥に足を踏み入れました。しかし、７年の歳月は当時の様子を伝えるものの様子が変わり、昨年の台風の爪跡もあり墓地の位置がわからず発見できないまま一度は諦めて菊間の町まで下りました。そこで、二神武信氏を菊仙荘に訪ね、その場所を確認して頂くことにしました。墓地のある場所を地図で教えて頂くつもりで訪問をしたにもかかわらず、武信氏は高齢の不自由な身体で現地に行くと云って車に乗り込みました。再度、菊間町の最奥、河之内集落まで車を走らせ、車を置いて山道を歩くこと10分余り、先程何度も探し歩いた場所を再び探しまわりました。武信氏には車から離れないようにと申し渡しておきましたが、我々が山中を探しているうちに、杖をつき、おしまいには腹這いになって山道を登って来られたのには驚きました。そして、墓地を探し当てることの出来ない我々に「廃屋になっている家の外井戸の真上に当たる山の上に大きな木がありその根元近くにご先祖墓はあるはずです……」とのヒントを与えて頂きその指示どおり山を駆け上り、真っ先に登っていた竹田会長が「あった、ありました」と大きな声で菊間二神氏最

古のご先祖墓の発見を告げました。午前中から探し訪ねた甲斐があったというものです。三基からなる先祖墓を撮影しながら竹田会長と大きさや、材質、形、彫り込まれた文字の判読などを行いました。これらの調査資料はきちんと整理をして、今後史料部や関係者と連携をとって精査できた時点で公表してゆくことにしています。

菊間二神氏最古のご先祖墓石

4．菊間二神氏家紋

矢紋と呼ばれる種類の代表的な紋は50種類程度ありますが、種類がとても多く、名称も一定していない物もあります。矢紋は矢を象ったものですが、弓紋と同様に矢を作る古代の職業部－矢作部や、弓を使う武家、あるいは矢のつく名字の者が使用しています。矢は羽と矢筈と矢尻と、さらに全形もあり、紋として変化に富んでいます。矢紋がはじめて文献に現れたのは『羽継原合戦記』で「鏑矢は、武蔵の国の住人太田源次郎、矢筈車は服部、高畠は遠鏑矢」とあります。矢紋には、並び、違い、重ね、車など多数あります。(『家紋　知れば知るほど』発行・実業之日本社)



「丸に並び矢」
菊間二神氏家紋

菊間二神氏の家紋は「丸に並び矢」と云われる紋様ですが、これまでのところでは二神氏の系譜で矢紋を持っているのは菊間二神氏だけでしか確認されていません。菊間二神氏が矢紋を使用した理由についての伝承は同家には伝わっていませんが、菊間二神氏の最古のご先祖

墓がある河之内集落周辺には、弓矢に使用される種類の矢竹が多く自生しているのに気がつきます。まっすぐに伸びる矢竹は二神氏の残党として風早郡から落ち延びた菊間二神氏にとっては一時も手放すことの出来なかった武器の一つだったと考えられます。それを、後の世に「並び矢」として家紋に使用した先祖の気持ちは大いに理解出来るところです。

また、城や、一族の集落を竹林で囲う方法は、敵に対する防御効果があり、大いに活用されていました。湯築城でも落城までは広い面積に植えられてあり、横山城周辺の竹林は、城の防御のため人為的に植えられたものでした。二神一族の残党として高縄山系の奥深い河之内集落に住み着いた菊間二神氏が村の周辺に竹林を育て、矢竹を並び矢として家紋にしたのはうなずける話です。

連載第７回・二神氏と苗字の歴史

編　集　部

二神の苗字が頼り、幼少期に別れた母を探す人

今回は、最近事務局へ問い合わせのあった二神氏の苗字に関わる事例を取り上げてみることにしました。

６月の初めのことでした。滋賀県に住む30歳代前半の男性Mさんから事務局に電話で連絡があり、「昭和24年生まれの父のことでご相談があるのですが……」とのことで、その内容を伺ってみると、そのMさんのお父さんの母、つまり祖母に当たる人物について調査をしたいのだが方法が判らないという。話によるとお父さんが生まれて３ヶ月で養子縁組をして広島方面に出されたといいます。これまではその事については殆ど話題にもなりませんでしたが、最近になって時折父が寂しそうな姿をしている光景を目にすることが多くなりました。どうしてなのか初めのうちは判らなかったが、最近になってその理由が、父の出自が不明確のままであることに気がつきました。

最近の新聞でも、人口受精で生まれた人たちが、自分の本当の父親を知りたいのに、法律の壁があって知ることが出来ない。また、父親として精子を提供した当時の医学生も、現在の生活に影響が及ぶので訪ねて欲しくない。との意見を持つ人が多いとも聞きました。しかしそれでも本当の父親を、母親を知りたいと考えるのが人間である証でもあると考えるようになりました。

そこで、ヒントになる様々な試みをはじめたところ、ホームページで二神氏系譜研究会のことを知り連絡した次第です。

とのことでMさんの祖母に当たる人物のキーワードについて聞きましたら、祖母は「二神和子と名乗り松山市で父を生んだと聞いています。事情があったのでしょう僅か３ヶ月で養子に出されました。祖父の苗字はモリキと聞いていますが、当てはまる漢字は判りません」

現在、生死も何も判りませんがもし二神氏系譜研究会で状況なり、調査方法が判るなら教示して欲しいのです。父の寂しそうな後ろ姿を見ていると何とかしてあげたいとの事でした。

そこで二神氏系譜研究会としては、基本的な取り組み方法として二つの取るべき方法を連絡しました。一つはお父さんの戸籍謄本を取ることと、二つは除籍謄本を取ることをすすめました。

このようなMさんのような事情を持たれる人たちが存在している一方で、個人情報保護の立場から、戸籍謄本は勿論のこと、一般の名簿、同窓会名簿まで取り扱いが益々難しくなり出しました。二神氏系譜研究会が発足する前には、電話帳で二神氏を名乗る方々の情報を得て案内状を出し、会をスタートさせた経緯がありますが、今日では、電話帳に個人名を掲載することさえしない傾向が強まっています。このため、二神氏を名乗る人々も水面下に沈み、少子化と相まって調査研究が益々困難になってきました。

Mさんのその後の経過がどのようになってゆくのか判りませんが、なんとかしてその要望を実現させてあげたいと考えています。それでも最初の決め手は苗字であり名前ではありませんでした。今後この件の続報をこの蘭で取り上げます。

特集①　太平洋戦争と二神氏

戦後60年特集を掲載するに当たって

二神　英臣

今年、2005年（平成17年）は太平洋戦争が終結して60年になります。世界的には第二次世界大戦が終結して60年でもあり、広い意味で云えば、太平洋戦争も第二次世界大戦の中の一つと云うことにもなります。

また、今年は日露戦争が終結して100年目にも当たり、改めて平和の尊さをかみしめる年でもあります。そのような節目の年であるためか年頭から太平洋戦争や日露戦争などをめぐる出版物が書店の店頭に目立っているように思えます。

二神系譜研究会でも速報№.19で予告していましたように会報第８号では二神系譜研究会としても戦後60年特集として「太平洋戦争と二神氏」の内容で編集してゆく方針を決めていました。このため、全国の各系譜を代表する会員と理事の方々に「太平洋戦争に於ける戦死・戦没者の紹介について」の文書を送付し、お願いをして参りました。６月30日の原稿締め切りまでに編集部に届けられた各系譜の戦死・戦没者の方々は一覧表の通りですが、関係者によってその生い立ちや経歴などが判明した方、そしてその方への追悼文や紹介文が、既に発表されているものも含めて戦死・戦没者の紹介に続いて関係者の了解を得て掲載させて頂きました。

この特集が本来なら水軍の子孫である二神氏が、海だけでなく大陸に大空に、若い二神氏各系譜の彼らが尊い命を絶っていった太平洋戦争を、「反省の心」と「不戦の心」を持って振り返り、再びあのような時代が来ることのないように努力をしてゆくための機会になれば幸いです。

また同時に、これらの戦死・戦没された方々が、歴史にもしも、や、

もしかして、は許されませんが、これらの方々が今日まで生存していたならば、二神氏だけで考えてみても一族や、二神氏系譜研究会の発展と前進に大きな力を発揮して頂けたことであろうことを思うとき、戦争の悲惨さと、非情さを改めて感じざるを得ません。

今年の夏、終戦から60年を節目として改めてご冥福をお祈りするためにこの特集に取り組んだ次第です。

【編集凡例】
① 氏名
② 生年月日
③ 二神氏の系譜（本籍・出身地）
④ 戦死・戦没・死亡年月日（亡くなったときの年齢）
⑤ 出生から亡くなるまでの略記

＊ このコーナーでは各系譜11名の戦死・戦没の方々を紹介しています。

「二神氏戦死・戦没者一覧表」では33名の方が紹介されていますが、二神姓を名乗る方々の全員をまとめたものではありません。会員と役員が原稿の締め切りまでにまとめたものであり、今後会報が発行されたあとで判明する方や、日中戦争や日清、日露戦争での戦死・戦没者は除いています。今後の動きを見ながら調査は継続してゆく予定にしています。

① 二神　孝満

② 大正10年２月25日

③ 愛媛県温泉郡北吉井村樋口
平井谷二神氏

④ 昭和20年５月４日（陸軍特攻誠第34飛行隊として沖縄方面で戦死）享年24歳

⑤ 二神孝満氏は旧姓が恒岡氏で父幾太郎、母タマ夫妻二男、四女の末っ子として生まれたため、長女の婚家先に養子入りし二神姓を名乗った。

松山北予中学、法政大学と進み、昭和17年松山西部62部隊（旧歩兵22連隊）に入隊。

久留米予備士官学校卒業後、熊谷陸軍飛行学校へ入り操縦将校の道を進むことになる。加古川中部第104部隊、神奈川東部第133部隊、明野飛行部隊と移動。昭和20年２月25日、特攻隊員に指名され明野から台湾台中飛行場へ移動昭和20年５月４日17時20分、第８飛行師団誠第34飛行隊の一員として四式戦「疾風」６機で台中飛行場を発進。沖縄方面へ出撃し全機未帰還。特攻戦死。

二神孝満氏の遺書（昭和20年４月12日封書日付）
「拝啓　御両親様今まで御便りも度々差し上げましたがこれが最後となりました。

この世に生を享けて二十五年、海よりも深く山よりも高き親の恩と小学校時代より教えられてきましたが、今更思い出されます。末子と生まれ種々御両親、姉上、兄上よりいつくしまれ、農家の子供として専門学校まで行かせていただき、何と御礼申し上げてよいやら、またこれという孝行も出来ず心残りです。だが今度は最初にして最後の孝行をさせていただきます。これがお父さんお母さんより

うけた御恩にむくゆる最大の孝行です。

よくやったとほめて下さい。それが唯一のお願いです。それをたのしみに僕はやります。後数日の命何も考える事はありません。毎日を北九州の旅館で過ごして居ります。

幼なかりし頃よりなれ親しんだ故郷の山川、幼なかりし頃の想い出はつきません。

御両親様末永く、あまり今となってはいうことも、書く事もありません。三恵や当朔松山の子供達が大きくなったら、樋口のおじさんは、飛行機に乗って敵の航空母艦に体当たりして戦死した。みんなもまけない様にしっかりやれといっておいて下さい。おじさんは靖国神社からみんなの成長を見守っているといってやって下さい。

満州の兄さん、吉金の兄さん、松山の兄さんに後の事はたのんでおきました。

心のこりは更にありません。御体に気を付けて、御大事に。二月二十五日、これは僕の誕生日です。この日に命令をいただきました。その時の気持ちはさっぱりしたものでした。飛行機にのり初めて故郷の空も飛んだし、思いのこす事はなくおちついた気持ちです。

僕が死んだ後で、僕がどんな人間であったかという事が分かっても許して下さい。

特に学生時代はお父さんやお母さんの考えていた様な人間でなかった事が多々ありますが許して下さい。五明の七枝も大きくなった事でしょうね。

今夜は特にしずかで色々思い出されます。いつまで書いても切りがありません。

御体に気を付けられて末永く、兄さんや姉さんによろしく。五明のみんなによろしく。松山のみんなによろしく。近所の人々によろしく。平井谷のみんなによろしく。先輩の後を追って靖国神社に行きます。なつかしい皆様、家、木、西の川、うらの山よさようなら。永久にさようなら。

お父さんお母さん泣かないで僕の成功をいのって下さい。もし、成功のあかつきはよくやったとほめて下さいよ。たのみます。

死んだ姉さんもほめてくれるでしょうね。土産話も出来ました。では孝満は元気で行きます。

お父さん、お母さん、姉さん、兄さん、永久にさようなら」

【宝来久道著『はるかなる故国を想いて』星文社2000.3.31発行より】

① 二神　辰雄

② 大正９年６月23日

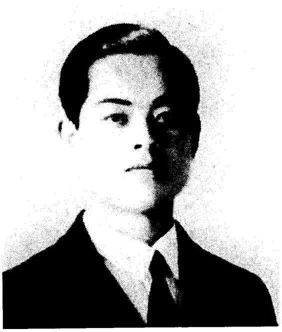
③ 愛媛県越智郡菊間町河之内
菊間二神氏

④ 昭和20年３月17日（ビルマ、ナングエ西方で戦死）享年26歳

⑤ 父為蔵、母アサヨの六男二女の末っ子として大正９年に越智郡菊間町河之内に生まれるが翌年父為蔵が死去。子供の頃から学業優秀であり、末っ子と云うこともあって、兄弟で学資を出し合い、旧制中学から早稲田大学へ進学。昭和15年３月30日早稲田大学土木科卒業。同年12月１日、善通寺三十六部隊砲兵隊入隊。同16年２月25日、中支派遣鯨部隊本部付として出征。後に烈部隊に編入となり無線技手としてビルマ方面に転戦しました。

昭和20年３月15日、オン・サン指揮下のビルマ人部隊３千人の出陣式がラングーンで行われましたが、建前と本音を使い分けたビルマ軍は、バー・モー首相の「宿敵英軍を殲滅せよ、日本軍の勝利なくしては、ビルマの自由も独立もない」との演説に反し、オン・サン国防相はその前日、既に対日宣戦を布告し、ビルマ軍の武装反乱が発生しました。こうしたビルマの戦況下、二神辰雄伍長は、昭和

20年３月17日ビルマ、ナングエ西方１kmの地点で戦死しました。



① 二神　種徳

② 明治41年６月19日

③ 愛媛県松山市
吉木二神氏

④ 昭和20年１月１日（山口県光市の海軍工廠に学徒動員引率中に羅病し病死）享年37歳

⑤ 父有種、母松代の四男一女の長男に生れる。

大正15年３月愛媛県立松山中学卒業。広島高等師範学校卒業後、博物学の教師として佐賀県女学校に約15年勤務していたが、山口県大津中学校の教頭さんが、ひょっこり訪ねてこられて本校で勤務するよう勧められ、そこで勤めるようになりました。山口県旧制大津中学校教師の時、勤労学徒を引率し山口県光市の軍需工場で勤労動員中集団赤痢に罹り、これがもとで、昭和20年１月１日病死、殉職しました。

① 二神　季種

② 大正８年６月１日

③ 愛媛県松山市
吉木二神氏

④ 昭和17年10月25日（ガダルカナル島上空の航空戦闘で戦死）享年23歳

⑤　父有種、母松代の三男に生れる。

昭和７年愛媛県立松山中学入学。相撲部に籍を置き県下の強豪と対戦。学業は常に優秀で、昭和12年３月の卒業時には優等賞をを授与されました。海軍兵学校第68期生に入学。昭和15年海兵を卒業。遠洋航海の後、霞ヶ浦海軍航空隊で飛行操縦士官の教育訓練を受け、さらに大分海軍航空隊で艦上戦闘機の操縦士官の教育訓練を受けました。

昭和17年８月、ニューブリテン島ラバウルを基地とする南太平洋航空作戦に参加しましたが、10月25日ソロモン群島ガダルカナル島航空戦でゼロ戦を駆使して空戦中戦死。

海軍兵学校同期でクラスメートの作家、豊田穣氏の著書『蒼空の器』によりますと「昭和17年10月25日、第二航空隊の零戦制空隊指揮官二神季種がガ島上空で戦死。愛媛県立松山中学出身。身体のひきしまったファイト満々の好漢であった」と書いています。

松山市道後鷺谷の墓地に眠っています。

①　二神　　勝

②　大正11年５月15日

③　愛媛県松山市
吉木二神氏

④　昭和19年12月２日（レイテ島上空の空中戦闘で戦死）享年22歳

⑤　父有種、母松代の四男に生れる。

昭和10年県愛媛立松山中学入学。15年３月同校卒業し、兄、季種の後を追うように海軍兵学校の71期生として入学。難しい操縦士の適性検査に合格して、海軍の戦闘機搭乗員となりました。昭和19年

12月１日フイリピンのレイテ湾に上陸をはじめた米軍を迎撃するために、第七次多号船団が、オルモック湾に向かって出撃しました。戦闘第302飛行隊の分隊長だった二神勝中尉は戦闘機空輸の任務をもってセブ島基地に進出していましたが、オルモックに突入する船団のあることを知り、特に願い出て12月２日、零戦に搭乗してその上空の直衛にあたりました。そこへ来襲のＰ47戦闘機と交戦となり、そのうち行方不明となりました。自機が被弾し、ジヤングルか、コモテス海、シブヤン海のいずれかに墜落したのではないかと見られますが、事実は不明のままです。

セブ島マバラカットなどを基地とする海軍神風特攻・第一金剛隊は昭和19年12月11日16時30分、爆装した零戦７機でセブ島基地を発進し、駆逐艦レイドを撃沈させています。

二神勝中尉は海軍神風特攻・第二金剛隊の隊長として出撃がきまっていましたが、その９日前の空戦で戦死されました。

【空襲後の呉市内】

① 二神　秀夫

② 大正９年４月１日

③ 広島県加茂郡下見村（現東広島市）西条二神氏

④ 昭和19年２月25日（バリ島ジンガラジャ沖において戦死）享年24歳

⑤ 父逸三、母イ子の三男に生れる。

生家は、軍都呉市内にあって、海軍の軍服や呉工廠で働く工員の作業服などの縫製を家業としていました。ミシンが20～30台稼働し、15～20名の人がいつも働いていました。広島市内にあった旧制中学

を卒業後は家業を手伝い、趣味の音楽鑑賞でレコードを聞くなど、当時としてはモダンな青年でした。「今のような音楽は無かった時代ですが、軍歌、クラシックの他、よくタンゴの曲を聴いていたのを覚えています」（７歳年下の二神武さんの記憶）

昭和19年に陸軍伍長として応召され、南方方面へ出征。昭和19年２月25日バリ島沖に浮かぶ応召先の島へ輸送船に乗せられて移動中、ジンガラジャ沖で敵潜水艦の放った魚雷攻撃で船とともに沈没戦死。いまだに遺骨の収容もされないままとなっています。

生家はその後、呉の空襲にあって秀夫氏が聞いていたレコード盤も秀夫氏を初めとする家族の写真もすべて焼失してしまいました。

---

① 二神　清孝

② 大正11年12月30日

③ 愛媛県松山市中西外34
中西二神氏

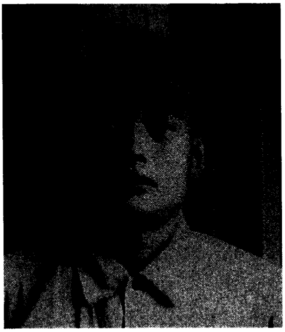
④ 昭和19年５月26日
享年25歳

⑤ 父廣一、母キヨ子の長男として生まれる。母キヨ子は清孝を生んで間もなく23歳で死去しました。

昭和12年村立正岡小学校高等科を卒業後、周桑郡庄内村にあった農業の修練場に二年間通いました。その後、家業の農業を手伝いながら18歳になった昭和16年春、当時、江田島の切串にあった海軍の建築部に同郷の庄部落の方と二人で就職しました。中国戦線の状況は抜き差しならぬ状況に陥り、米英との戦争は避けられない情勢にありました。昭和18年海軍軍属に徴用され同郷の庄部落の方と南方方面に派遣されますが、昭和19年５月26日、同郷の庄部落の方と共

に戦死しました。しかし、戦死した場所や徴用された時の組織や状態については何も判っていません。

父廣一さんと後妻のシズ子さんの間に生まれた正さん（75歳）は異母兄の清孝さんの思い出について「兄とは8歳開いていましたので余り多くの思い出はありませんが、私が小学生の頃、軍刀を下げて家の中に居たのを見かけたことがありました」と語り、また、兄が江田島から帰ってきたときに「これは秘密の話であるが、と前置きをして、今、呉では世界一大きい軍艦を造っている。と話していたのを思い出します。今から思えば戦艦大和の事を云っていたのですね」と話して居られました。（超弩級の戦艦大和は昭和16年12月16日呉工廠で完成しました）



① 二神重次郎

② 大正4年6月27日

③ 愛媛県温泉郡神和村大字二神甲571番地第6
本島二神氏

④ 昭和20年4月14日（ウオツゼ島方面において戦死）享年31歳

⑤ 父倍三郎、母ヨシの四男六女の次男に生れました。昭和2年3月二神尋常小学校卒業。昭和14年5月臨時応召で松山歩兵第22連隊留守隊へ。同年8月応召解除。

昭和16年11月4日、臨時招集により歩兵第122連隊に入隊、第5中隊に編入、11月15日三津浜港から台湾の基隆に上陸しました。開戦の12月8日から作戦が開始され、高雄から比島マビラオに上陸し、昭和17年1月9日より第1期から4期までの比島攻略戦に参加します。

昭和18年７月に同部隊に南東太平洋方面への転進が決まり８月、マニラ港を出港トラック島経由でクエゼリン島に到着。さらにウオツチエ島に上陸し、マーシャル群島の警備にあたります。

昭和18年12月南洋第１支隊第５中隊に編入され、翌年３月までマーシャル群島諸島戦に参加します。

昭和19年３月10日からマーシャル群島ウオツゼ島守備に従軍しますが、昭和20年４月14日、同島での作戦中に弾丸が頭部を貫通して戦死。

① 二神　朝知

② 大正７年10月21日

③ 愛媛県温泉郡川上村大字北方1456番地
北方二神氏

④ 昭和19年８月15日
戦病死　享年27歳

⑤ 父伊之助、母ミネの男３人の長男として生まれました。

昭和８年３月川上尋常高等小学校を卒業し、家業の農業を手伝っていましたが、25歳になった昭和18年11月25日臨時召集によって、歩兵第143連隊補充隊に入隊しました。

昭和18年12月２日、北支派遣のため下関港を出港して12月17日湖北省武昌に上陸します。同地域付近の警備の任務に当たっていました。

昭和19年４月29日、から第一期湘桂作戦に参加しますが、同年８月２日湖南省衡陽での戦闘中脚気に罹り、第40師団の野戦病院に入院しました。

昭和19年８月15日、湖南省黄茶嶺にあった第68師団の野戦病院で脚気が原因で戦病死しました。陸軍歩兵伍長

① 二神　益昌（ますよし）

② 大正５年月日

③ 高知県幡多郡大月町小才角
小才角二神氏

④ 昭和21年５月17日
戦病死　享年31歳

⑤ 父幾右衛門、母於多美の二男として生まれました。

昭和４年３月尋常小学校を卒業し、高知県立城東中学校（現追手前高校）に入学。さらに同校を卒業後の昭和12年朝倉44連隊に入隊。甲種幹部候補生に首席合格し、任官後抜群の成績で進級し、中華民国に出征しました。

昭和17年１月13日山東省に於いて負傷しましたが、その後回復し再度出陣。独立混成第84旅団警備隊長として勤務中、江西省彭沢懸にあった独立混成第84旅団療養所で、妻多満喜さんと一人娘の満亀さんを残し、昭和21年５月17日戦病死しました。

現在、高知県幡多郡大月町小才角の忠魂墓地に眠っています

① 二神　種人

② 明治35年12月17日

③ 愛媛県温泉郡神和村二神
本島二神氏

④ 昭和18年３月３日午前10時30分（西南太平洋ニューギニア付近で戦死）享年31歳

⑤ 父団四郎、母トリの５男１女の次男として生まれました。

明治42年３月二神尋常小学校を卒業しますが、２歳年上の長男が大正14年に24歳の若さで亡くなってからは、本島宗家二神家の事実上の跡取りとして家業を手伝っていました。種人氏の下に三男英三郎、四男司郎、五男道夫と３歳づつ年の離れた弟がいましたが、三男英三郎氏は18歳で亡くなり、太平洋戦争が始まった時点で残されたのが四男司郎、五男道夫氏の三人になっていました。そうした状況のなかで、海軍軍属として徴用されていた種人氏は、ガダルカナル島からの撤退が決められた翌年の春、昭和18年３月３日午前10時30分西南太平洋ニューギニア付近で戦死しました。

これによって本島宗家二神家は四男司郎氏と五男道夫氏の二人だけになり、今日の本島宗家二神家の状況を迎えることとなりました。

玉音放送後、皇居前広場に駆けつけうずくまる市民。

「図説 太平洋戦争　河田書房新社」より転載

【二神氏関係戦死・戦没者】

氏　名	系　譜	戦没年月日	享年	死亡の場所・状況	その他
二神　種徳	吉木二神氏	昭和20年01月01日	36歳	光市の軍需工場で学徒動員引率時に病死。	山口県旧制大津中学校教師。
二神　季種	吉木二神氏	昭和17年10月25日	23歳	ガダルカナル島上空の空戦で戦死。	海軍大尉。大正８年６月１日生
二神　勝	吉木二神氏	昭和19年12月02日	22歳	レイテ島オルモック上空の空戦で戦死。	海軍少佐。大正11年５月15日生
二神　孝満	平井谷二神氏	昭和20年05月04日	24歳	台中飛行場から沖縄方面特攻，全機未帰還	陸軍大尉。大正10年２月25日生
二神　辰雄	菊間二神氏	昭和20年03月17日	26歳	ビルマ、ナングエ西方１㎞の地点で戦死	陸軍伍長。大正９年６月23日生
二神　秀夫	西条二神氏	昭和19年02月25日	24歳	バリ島ジンガラジャ沖で輸送船と共に撃沈	陸軍伍長。大正９年４月01日生
二神　清孝	中西二神氏	昭和19年05月26日	25歳	南方方面で戦死	海軍軍属。
二神重次郎	本島二神氏	昭和20年04月14日	29歳	マーシャル群島ウオツゼ島で戦死	陸軍兵長。大正４年６月27日生
二神　朝知	北方二神氏	昭和19年08月15日	27歳	湖南省廣茶嶺第68師団野戦病院で戦病死	陸軍伍長。大正７年10月21日生
二神　種人	本島二神氏	昭和18年03月03日	40歳	西南太平洋ニューギニア付近、暁部隊所属	海軍軍属。明治35年12月17日生
二神　鶴好	小才角二神氏	昭和20年11月06日	25歳	愛媛県越智郡伯方町木ノ浦沖合海上	陸軍兵長。
二神　重信	小才角二神氏	昭和21年05月04日	35歳	満州国間島省延吉病院で戦病死。	陸軍兵長。
二神　益昌	小才角二神氏	昭和21年05月07日	31歳	中華民国江西省彭沢懸第84旅団療養所病死	陸軍少佐。
二神　茂松	小才角二神氏	昭和18年01月19日	27歳	東部ニユーギニアのギルワ	陸軍伍長。
二神　呉市	小才角二神氏	昭和19年08月04日	38歳	小笠原方面	陸軍軍属。
二神　孝行	小才角二神氏	昭和20年07月01日	22歳	中華民国広東省南雄患者診療所で戦病死。	陸軍上等兵。
二神　隆則	小才角二神氏	昭和20年07月28日	28歳	ビルマ国、ペグ県ニューアンゼン	陸軍兵長。
二神　岩春	小才角二神氏	昭和21年04月17日	32歳	バワ島方面	陸軍伍長。
二神　末広	小才角二神氏	昭和20年03月28日	35歳	本州南方海上	海軍軍属。
二神　忠幸	小才角二神氏	昭和20年05月10日	20歳	比島方面	海軍二等兵曹。
二神　鉄男	小才角二神氏	昭和20年08月17日	38歳	大牟田市	海軍一等水兵。
二神　鉄廣	小才角二神氏	昭和20年07月23日	38歳	戸塚海軍航空隊飯塚分院	海軍上等水兵。
二神小三郎	小才角二神氏	昭和16年08月29日	40歳	呉海軍工廠	海軍軍属。
二神　輝年	頭集二神氏	昭和19年08月15日	33歳	比島レイテ島	陸軍軍曹。
二神　馨	頭集二神氏	昭和18年06月05日	24歳	ソロモン島、船舶輸送中	海軍軍属。
二神　清孝	上之谷二神氏	昭和17年12月02日	37歳	ニユーギニア．ブナン地区の対空戦闘で戦死	海軍二等機関兵曹。
二神　秀保	上之谷二神氏	昭和18年02月08日	23歳	トラック島付近の警備中戦病死	海軍二等機関兵曹。
二神　正雄	上之谷二神氏	昭和20年03月17日	29歳	硫黄島で玉砕戦死	陸軍伍長。
二神　勉市	上之谷二神氏	昭和19年01月01日	23歳	南洋ビスマーク諸島上空の空中戦で戦死	海軍二等飛行兵曹
二神　數	上之谷二神氏	昭和19年07月08日	36歳	サイパン島で戦死	海軍二等兵曹。
二神　福行	小川二神氏	昭和19年06月24日	34歳	ビルマ、アキャブ県セニンビア	陸軍兵長。
二神　幹雄	常竹二神氏	昭和20年11月04日	25歳	国立愛媛療養所	陸軍一等兵。大正９年５月11日生
二神　昇	北条二神氏	昭和20年05月20日	22歳	ルソン島バレテ峠	陸軍兵長。大正12年１月25日生

～戦死・戦没者を偲ぶ～

吉木二神家と第二次世界大戦

二神　弘

1．吉木二神家かく戦えり

松山市高浜港からフェリーで約1時間西に向かうと中島と云う蜜柑の島に着く。その中島の北西部に吉木と云う小さな部落があり、怒和島に面した美しい穏やかな海岸地帯で、数軒の二神氏が生計を営んでいました。私達の吉木二神氏の系譜は次の通りです。

父	二神有種	長男	二神種徳
母	〃 松代	長女	二神節子
		二男	二神　弘
		三男	二神季種
		四男	二神　勝

以下に、男4人兄弟各人の略歴を記すことにします。

二神種徳（タネノリ）

大正15年愛媛県立松山中学（以下松中と呼ぶ）卆

広島高校師範学校卆、博物学の教師として佐賀県、山口県の旧制女学校、中学校に勤務する。山口県大津中学教師の時、勤労動員で光海軍工廠にいた際、集団赤痢に罹り、昭和20年1月、37才の若さで病死、殉職しました。

二神　弘（ヒロム）

昭和10年松中卆

陸軍士官学校卆（53期生）

昭和15年5月のある日、戦闘機での演習中に、後続機の追突事故に遭い、プロペラで右下肢を切断、その後も航空通信関係に配属され

て終戦となりましたが、それから人生のやり直しで、猛勉強をして東京大学理学部の地理学科に入学し、焦土と化した東京で、研究室の一角に寝起きをしながら研究に没頭し、卒業したものの、公職追放に遇い、全く最低の生活を余儀なくされた。地理学の研究で理学博士を受け、富山大学の教授を勤め停年を迎え、愛知県の光陵女子短大の教授となった。72才の年に勲三等旭日中綬賞を受章した。

二神季種（スエタネ）

昭和12年松中を卒業し、海軍兵学校の68期生となり、卒業後、難しい航空機の操縦士の適性検査に合格し、海軍の戦闘機乗りとなり、昭和17年８月、激戦のラバウル基地に赴任し、10月25日のガダルカナル島航空戦で零式戦闘機に搭乗奮戦したが、遂に戦死した。時に23才の若さであった。死後海軍大尉に昇進した。

二神　勝（マサル）

昭和15年に松中を卒業して、海軍兵学校の71期生となり、彼も亦、難しい操縦士の適性検査に合格し、海軍の戦闘機乗りとなった。昭和19年12月１日、フィリピンのレイテ湾に上陸を開始した米軍を迎撃する為、第七次多号船団が、オルモック湾に向って出撃した。戦闘第302飛行隊の分隊長であった二神勝中尉は、戦闘機空輸の任務をもってセブ基地に進出していたが、この地でオルモックに進入する船団のあることを知り、特に望んで12月２日、その上空の直衛に当たり、来襲のＰ47戦闘機と交戦、遂に行方不明となった。被弾してジャングルか、カモテス海か、シブヤン海のいずれかに自爆したのであろう。この二神中尉も特攻隊員として、近く出撃の予定であって、当時の「日本ニュース」に大写しに上映された。（このことについては、後の項で述べる。）また、二神中尉等の上空援護により、船団は日没までにはオルモック湾に進入することが出来たとのことである。戦死後、海軍少佐に昇進した（享年22才であった）。

2．弟季種との今生の別れ（平成４年に書かれたもの）

私の弟、二神季種が昭和17年10月25日ソロモン諸島ガダルカナル航空戦にて戦死してから丁度50年になりますので当日私は霊前に座し弟の位牌と写真に向い、私より２才年下の弟の幼少時代から最後の別離の日までを追想しました。昭和17年７月いよいよ弟が南方戦線へ征く直前私の所に別れに参りました。

当時私は陸軍航空通信学校（水戸）に勤務しておりましたので、弟は水戸の私の下宿に一泊し、夜遅くまで時を忘れて語り合いました。翌朝「では！」と軽く目礼して、弟は去って行きました。よく晴れた朝で、弟の海軍士官の白い軍服が朝日に真白に輝いて眩しい感じでした。心中ひそかに期する所があったのか、弟は一度も後を振り返ることもなく、正面を視つめたまま去って行きました。この時の情景は今もなお鮮明に私の心のフィルムに焼き付いています。

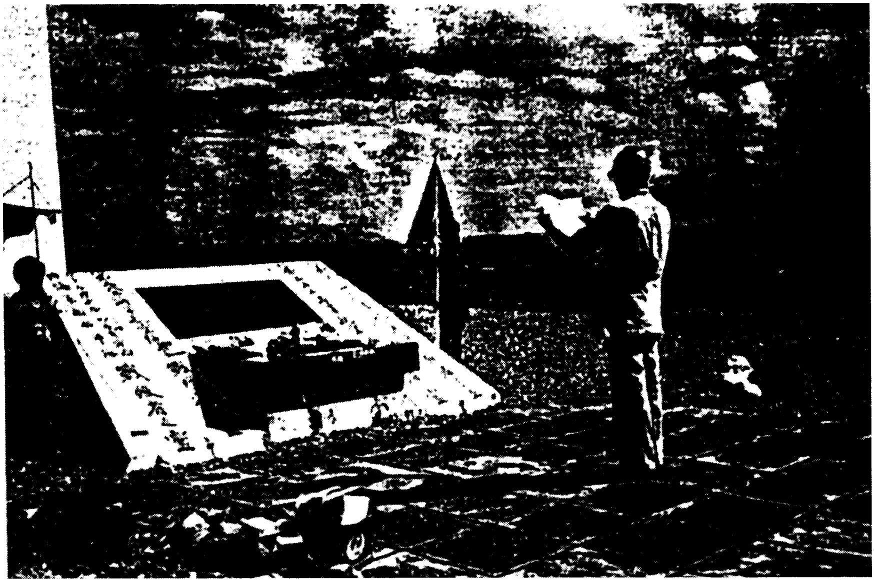
別れてから三ヵ月後の昭和17年10月25日、弟は第二航空隊制空隊指揮官として、ラバウル基地から飛び立ち、攻撃目標のガダルカナル島まで片道1000㎞、往復2000㎞、航続距離の長い零式艦上戦闘機とてもガ島上空の在空戦闘時間は僅かに15分程度と云う正に極限的状況のなかで米空軍と交戦し、武運拙くガ島上空に散華しました。時に弱冠23才、今、故郷の松山市道後鷺谷の二神家の墓地に眠っています。まさに天なり命なりの思いです。（海兵68期　期回誌より）

3．追悼のことば（ガダルカナル島戦没者慰霊塔前にて）

第二次世界大戦において、激戦中の激戦と言われたガダルカナル攻防航空戦において、戦没されました皆様に、謹みて追悼のことばを捧げます。

私達第582海軍航空隊の旧隊員と、同隊の戦没者遺族は第40回目の終戦の年を迎えるにあたり、ソロモン方面慰霊団を組織しまして、かねて念願のここソロモン諸島ガダルカナルの地に参りました。

皆さん、本当に遅くなって申し訳ございません。どうかお許しくだ



ガダルカナル島戦没者慰霊塔前にて追悼の
ことばを捧げる　二神　弘氏（季種兄）（昭和60年夏）

さい。

皆様も鵬程万里を越えて、ガダルカナルに参りました私達を迎えてきっと喜んでおられることと思います。そして「よく来てくれました」とねぎらって下さい。皆さん、私達は皆さんとガ島攻防航空戦を共に戦った戦友達です。判りますか。よく私達を見て下さい。私達はラバウル航空基地から攻撃目標のガダルカナルまで片道1000km、往復2000km、航続距離の長い零式艦上戦闘機とても、ガ島上空の在空戦闘時間は僅かに15分程度と云う、正に極限的状況のなかで共に米空軍と戦いました。本当に苦しい戦いでした。そしてどのような天の配剤だったのでしょうか。皆さんはガ島上空の華と散って帰らぬ人となり、私達は生きて祖国の土を踏み、焼土と化した戦後日本の再建、復興の大業に身を挺することとなりました。今生における「生と死の分かれ」正に天なり命なりと言わざるを得ません。

皆さん、ガダルカナル航空戦で散華された皆さん、私達遺族も戦友

の方々の暖かいお計らいで、かねて念願の肉親「戦没之地」に参ることができました。皆さん、判りますか。皆さんの肉親です。貴方の兄です。貴方の妹です。貴方の「ガ島航空戦にて戦死」の公報が入りました時、父も母も兄弟も皆で泣きました。かねて覚悟はしていましたが、現実に貴方の戦死を知らされた時の悲しみは、到底、筆や口では伝え得ません。特に貴方を生み育ててくれた父や母の嘆き悲しみはいかばかりだったでしょう。その心中を忖度する時、涙を禁じ得ません。元気でお別れしたあの日、あの時の貴方の姿は今でも私達の脳裏に鮮明に焼き付いています。皆さん、私達肉親はみんな元気ですと申し上げたいのですが、戦後40年の長い歳月のなかで高齢のご両親のなかには既にみまかりし方もございますことをご報告しなければならないことは、とても悲しいことです。皆さん。

皆さんが生命をかけて守って下さった祖国日本は、あの敗戦の焦土から立ち上がり、昭和20年代の国土再建、復興期。昭和30年代以降の高度経済成長期を経て、現在国民総生産では自由世界第二位の経済大国に成長発展しました。日本の歴史が始まって以来の経済的発展を達成いたしました。この戦後日本の発展と平和は、実に皆さんの尊い犠牲の上に築かれたものであることを私達は決して忘れてはいません。皆さんは永遠に日本の歴史に、そして私達の心の中に生き続けております。皆さん、どうか心安らかにお眠り下さい。

皆さんの戦友と遺族一同　　　　　　　　　　（季種兄　二神　弘）

4．スクリーンで14年目の対面（愛媛新聞　昭和32年10月15日）

12日正午前、松山市大街道　有楽座で“電撃作戦十一号”を上映中、観覧席から『マサルッ』と立ち上がって叫んだ老人があった。レイテ湾作戦のため基地を飛び立つ特攻隊の実写フィルムの中にわが子二神勝海軍中尉の姿を見た父親、松山市宮西町　二神有種さん（77）の叫び声だった。非情なスクリーンは14年目のこの親子の対面を30秒とは許さなかったが、一緒に映画を見ていた近所の画家柴田章さんは、勝

君の出てくるシーンをカメラにおさめ、その肖像画を描いて二神さんに贈ることになった。写真は映画に出てくる二神旧海軍中尉で円内は少尉時代の写真である。

金剛特攻基地からレイテ湾作戦に飛び立つ二神勝中尉
（実写フィルムの一コマ）

真珠湾攻撃からフィリピン作戦のころ迄の前線や内地の表情をとらえた実写フイルムを編集したこの映画は、さる５日から有楽座で上映されていたが、11日夜、勝君の幼友達　同市宮古町の山内さん（27）がその中に勝君をみて二神さんに伝えた。驚いた二神さんは翌12日松代婦人（70）と柴田さんを同伴して有楽座に駆け付け、暗い座席の中から映画の一齣一齣を見逃すまいと目を光らせた。映画の中ごろに遂に勝君が出た。金剛特別攻撃隊基地からレイテ湾作戦に飛び立つ20人余りの隊員に命令を伝達している勝君の横顔がちらっと映った。『アッ』驚きの声が出掛かった次の瞬間、もう再び帰らないだろう飛行機に向かって隊員たちと駆け足で行く勝君の顔が大きくアップされた。『マサルッ』有種さんは立ち上がり、松代婦人も『マサル、マサル』

と繰り返し涙ぐんだ。老夫婦の目には勝君の顔だけが鮮明に焼きつけられ、あとの画面は何を見ているのか判らない。松代さんが最後に勝君と会ったのは18年の秋、休暇で北宮古町の実家に帰った時だった。『母さん、僕どうして大人の顔にならないんだろう。僕がいつまでも子供のような顔をしているので、隊の皆が、“お前は末っ子だろう”なんてからかうんですよ』笑いながらこういって家を出ていったが、基地で淡々として死の飛行機に向かって行く勝君の、その無感動な顔は松代さんも始めて見る顔だった。同席していた柴田さんは、二神さん夫婦を少しでも慰めようと14日はカメラを持って同座に出掛け、勝君の写真を撮り、肖像画を描いて二神さんに贈ることになったが、この話を聞いて勝君の幼友達や、松代さんの友人、二神さんが戦時中住んでいた北宮古町の人たちもこぞってこの映画を見に行き、勝君との別れを惜しんだ。(愛媛新聞社　提供)

5．吉木二神四兄弟

以上のように四人の兄弟が、当時進学校として、また、伝統校として有名であった愛媛県立松山中学（松中）に揃って進学し、長男の種徳は広島高等師範学校に、二男弘は陸軍士官学校に、三男季種は海軍兵学校に、四男勝は海軍兵学校にと難関を突破して入学し、故郷を後にしてそれぞれの任地で厳しい訓練を重ね、日本国の繁栄と、故郷に残した吉木二神氏の弥栄を信じ、全霊を投じて戦ってきた。優秀な二神家の男兄弟四人のうち三人迄が、戦雲晴れやらぬ雲の彼方に消えていった。

近所の方が、終戦直後、私に話してくれた言葉ですが「もし、弘さんが戦死していたら、兄弟全部いないわけで、残されたお父さんとお母さんは、発狂したでしょうね！」と。両親の嘆き悲しみ様は、筆舌に尽くせぬものがある。しかし、当時の新聞には戦死された方々の武勲を讃え、そのご家族は、健気にも国に殉じた子の「死」を、寧ろ喜びであり、名誉なことと報道している。

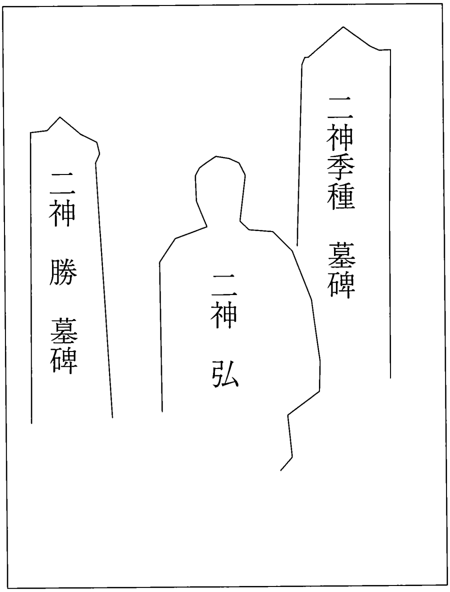
父有種は戦争中台湾の製糖会社に勤めていたが、終戦とともに、リュックサック一つで引き揚げて帰ってきた。松山の家は、米軍の焼夷弾攻撃で焼けてしまい、戦後は正に最底辺の生活でした。あれから60年、いろいろな事があり、やっと今日までやってきた!! というのが、率直な感想です。

「松中、昭和16年卆の高田英夫氏は、次のように評された。兄弟三人揃いも揃って、陸士、海兵の難関を突破し、更に至難と思われる戦闘機パイロットの適性検査に合格したとは、誠に珍しい事である。

二神兄弟は日本人の中の優秀家系という事が出来る。その中の二人までが戦争で失われた事は誠に残念である。

しかし、天は、優秀な三人兄弟が戦争によって全部死滅するのを惜しんで、せめて、二男弘氏だけにでも天寿を全うするように配剤したのかも知れない。」

(『松中、東高同窓会報「明教」第15号　1985』より転載)



道後鷺谷　二神家墓地

菊間河之内集落と叔父辰雄の想い出

二神　昌生（菊間二神氏・理事）

菊間の駅から、街中を通り抜け、更に１時間半ぐらい山道を登ると其処が河の内の集落です。

昭和27、８年頃、私は父の故郷である河の内で、半年ぐらいお祖母さん、四男武信叔父さん、従兄弟の処で河の内の生活を体験しました。

現在は道路も整備されて（ダム工事）車で登れますが、当時はジャリ道で、子供達も歩いて菊間の学校へ通っていました。

私も自転車を押しながら、昔の人は何でこんな山奥で暮らしたのだろうか、と考えながら最後のカーブを曲がり、此処が集落の入り口だと思っていました川の流れに沿って真っ直ぐ行くと、一本の橋、村の中心です。

橋を渡り右へ三、四軒目に駄菓子やアメ玉を売っている、村で一軒しかない小さなお店がありました。河の内では最大で40世帯ぐらいで、電話はこの店に１本あるだけでした。父の実家は橋を渡り、左に四、五軒目だったように記憶しています。

このような小さな村でも、太平洋戦争では４名の戦没者があり、横田姓の方が３名、そして二神辰雄。

祖父二神為蔵は妻アサヨと六男二女の子宝に恵まれました。辰雄は大正９年６月23日に、末っ子六男として誕生しましたが、翌年祖父為蔵は若くして他界しました。その翌年私の父は（次男　潔）河の内を後にして、東京に出稼ぎに旅立ちました。

昭和10年の秋、東京市足立区竹ノ塚で私は生まれました。翌年辰雄叔父さんが、早稲田に受験の為上京し、土木科へ入学しました。

末っ子の辰雄叔父さんは頭が良かったので、兄弟で学資を出し合い東京の大学へと送りだしたそうです。現在は地下鉄が出来、便利になっていますが当時の竹ノ塚は、東京の片田舎でした。母の弟で実叔父

さんが中野区で下宿をしていたので、其処に居候して通学したそうです。

翌年日本は太平洋戦争に突入しました。関東軍も満州に戦線を拡大し、多くの民間人も満州に進出しました。私の父も航空会社に仕事が内定し、家族そろって満州に渡りました。その後長女サワエ（夫妻）、長男直市（一家）、四男武信（夫妻）と続々集まって来ました。辰雄叔父さんも、昭和15年３月早稲田を卒業し、姉サワエ叔母さんの招きで満州に渡り、測量技師の仕事に就きましたが、その年の12月１日に召集令状が来ました。善通寺36部隊砲兵隊へ入隊、翌年２月25日、中支派遣鯨部隊本部付きとして出征しました。

後に烈部隊編入無線技師として、ビルマ方面を転戦したそうです。昭和20年３月17日時刻不明、ビルマチャングワ西方一キロにて戦死、との報告が、愛媛地方世話部長、石川冶水氏よりありました。戸籍には昭和21年１月４日受付と記載されていました。

「文祥院賢光勇辰居士　故　陸軍伍長　二神　辰雄乃墓」村の人達で建ててくれた四基の御墓の一基です。

長男直市叔父さんは終戦をハルピンで、バラバラになった部隊から逃げて、奉天まで歩いて帰って来ました。次男潔（私の父）は二度海軍に召集されました。二度目の時は乗っていた戦艦が撃沈され、命からがら泳いで逃げたそうです。四男種広叔父さんは、ビルマ方面をトラックの運転手として転戦し、次は医療班の手伝いをし、その後医師でもないのに治療行為までさせられたそうです。

遠く戦国時代の末か、元禄時代の初期か解りませんが、戦火を逃れ山奥へ避難した先祖は、川の周りで細々と歴史を積み重ねて、村で収穫があった時は（大根）大八車を押して、今治方面へ売りに行ったそうです。

墓石が建っている所は、北条方面、今治方面への出入り口だったようです。ダム工事の為、道路は整備され、橋も立派になりましたが村の人達は何処へ、今では２，３軒ぐらいしか残っていません。

時代が変わっても無くならない戦い、戦争。次に又愚行があるならば、今度は墓石も残ら無いかも………。

菊 間 河 之 内 の 集 落

～苦難の引き揚げとその後～

牡丹江の二神一族顛末記

二神　照夫

「我輩は、二神一族の末裔である」と胸を張ったものの、どの系統に属する二神であるかは、未だに分からない。多分、猫であったらさしずめドラ猫に類するのであろう。立派な家系図も何もない。

昭和21年９月上旬、薄汚れた服装の私たち４人（姉、兄、弟それに私）は、山陰線は宍道湖のほとりにある小さな駅に降り立った。小雨が私たちを迎えてくれた。４人とも持物などほとんどなかった。しかし、心はなんとなくうきうきしていた。今でもその理由が分からない。小さな駅のすぐそばに、伯父、つまりお袋自慢の弟は、海軍から復員し、新婚早々であった。私たちがいきなり４人も転げ込んできたのだから、さぞかし迷惑だったろうが、この伯父夫婦のお蔭で私たちは、糊口をしのげた事を今でも感謝している。

終戦まで牡丹江市遠山太路４の４に二神家があった。親父は、小さな会社の課長をしていたが、子供のようにわがままな面があった。お袋は子沢山、７人の子供たちの面倒を見続けていた。長兄は、現在の長春にあった建国大学を卒業し、陸軍の幹部候補生として東満州の間東にいた。姉は、女学校を卒業して、鉄道管理局に勤めていた。次兄と私は、それぞれ中学３年生と１年生で二人とも寮生活をしていた。次兄は、牡丹江より更に東にある開拓団に援農にいっていた。多くの犠牲者を出した「麻山」の近くの開拓団だったようだ。幸い、ソ連が進入してくる数日前に牡丹江に帰ってきていた。１日か２日帰るのが遅かったら、どうなっていたか分からない。私は、中学といっても４月入学したばかりだったから、終戦の８月までは、僅かに４ヶ月だった。初めての寮生活に慣れることが精一杯であった。軍歌、学徒動員

の歌などを歌いながら、飛行場の草刈作業（勤労奉仕）等の連続であった。すぐ下の弟は小学校４年生、その下は妹で５歳、更にその下は弟で３歳だった。

何故か理由はよく分からないが、私たちは牡丹江から逃げ遅れてしまった。牡丹江から南に下がった東京城付近まで徒歩で逃げ延びたところで、ソ連軍の戦車部隊に追いつかれてしまった。東京城から７キロメートルほど離れた鉄道自警村に収容されることになり、前後左右をソ連兵に囲まれながらの行進が始まったが、運の悪いことに、親父は体調不良で歩くことができない状態だった。最初は、ソ連の兵隊が馬を貸してくれたのでうつ伏せの状態でまたがっていたようだが、足手纏いになったのであろうか、馬から下ろされた親父は、マンドリンといわれていた銃で撃たれてしまった。私たち女子どもは、できるだけ長い列の中ほどを歩いていた。親父の面倒を見ていた次兄は、列の最後部の方にいたようだ。

乾いた銃声が親父との永遠の別れになってしまった。次兄は、血相を変えて母や私たちに父の死を知らせに来た。親父をどうすることもできないまま、黙々と歩き続けた。誰も涙さえ流さなかった。いや、流せなかった。お袋が一番辛かったと思う。親父は、長兄に貰った新しい軍靴がとても気に入っていたようだ。それを履いて死んだのだった。

鉄道自警村に２ヶ月ほど収容されていたが、自由に移動できるようになったので、数家族がまとまって、牡丹江経由でハルビンまで鉄道で移動した。言うまでもなく貨物列車だった。私たちが指定された収容所は、ハルビン駅の近くにあった東本願寺の分院だった。小さな子供を抱えたお袋は、一番初めに栄養失調になった。自分は食べなくても子供にという気持ちが強かったのだろう。堂々たる体躯の持ち主だったのに。翌年の１月になると弟や妹が弱ってきた。また、お袋は自分の死期を悟ったのであろうか、一番下の弟を中国人に預ける決心をした。いまだにその弟の消息は分からない。やがて、５歳の妹が亡く

なった。この子が収容所で「花嫁人形」の歌を歌ったことがある。とても上手に歌ったが、何か物悲しい思いがした記憶がする。今でもこの歌を耳にすると僅か５歳で亡くなった妹のことが思い出すのでつらい。２月末、母は実家のことや祖母のことを思いながら永久に帰らぬ人となった。

あとに残った兄弟姉妹４人は、自ら食べていかなくてはならない。姉は、ロシヤ人の家庭に女中さんとして住み込んだ。小学校４年生の弟は、日本人会の斡旋で近くの孤児院に収容された。私と兄は、自分の食い扶持を求めて中国人の所へ住み込みで働いた。私は、朝から晩まで曲がった古釘を伸ばしては売物にする店、洋服の仕立て屋の下働き、バッジやピン止めを作る店のふいご吹き、八百屋の下働きなどをしたが、お金を貰った記憶はない。幸いなことに、何処の家でも一度もいじめに会ったことはない。近所の同年輩の者からもいじめられた覚えもない。休みの日には、八百屋の２，３歳年上の息子が京劇を観に連れて行ってくれたり、食べ物を買ってくれて二人で食べたことなどを思い出す。

平成17年５月現在、一緒に引揚げてきた４人だけが健在である。４人とも70歳を過ぎてしまった。４，５年前から毎年、４家族が家族旅行をしている。兄弟の結束は固い。兄弟で両親や妹の眠っている中国を２度も訪ね、供養をしてきた。昨年は、弟と二人で、親父が亡くなり、混乱の真最中に生活をした東京城の鉄道自警村跡を探し当てた。一生懸命に面倒を見てくれた権通訳のお蔭である。

僅か４，５歳であの世に行った妹が不憫でならない。ソ連経由で復員してきた長兄も亡くなった。中国に残してきた弟のことが気になり、中国からの孤児が訪日するたびにニュースに耳を傾けた。厚生省にも何回か足を運んだが未だに消息が分からない。親父もお袋も私たち子どもから一銭の小遣いを貰うことはなかった。「両親が戦後も生きていてくれれば、多少なりとも楽しい思いをさせてあげられたのに」と、いつも残念に思う。この話は、兄弟姉妹が会うたびに必ず出る。

書きたいことは山ほどあるが、いつも涙があふれ出てきて書けない。つい最近、次兄から「以前書いた〈我が避難の記〉を加除訂正して冊子にした」という連絡をもらった。楽しみにしている。

私の親父とお袋評は、「夫婦揃ってお人好しで、世話好きで子沢山」。このような気質は、二神一族の特色でしょうか。

以上が中国の牡丹江にまで進出した「二神家」の顛末記である。「俺のことをもっとカッコよく書け。ドラ猫の家系ではない、河野通有の………」と親父が天国からわめいてきそうな気がする。

(2000年10月７日　江田島　自習室前にて)

「亡き父の故郷探訪、私の戦中、戦後の放浪記」

大分県別府市　二神末次三

昭和２年２月生まれの私は、西暦で1927年２月、当時は数え年で表現していたので大正15年生まれの方々と同期に等しく、現在満78歳と６ヶ月、間もなく八十路の傘寿を迎えます。昔の一般普通の生活表現では、老醜を晒す齢となりました。

人それぞれに、生い立ちや生活環境も異なり、肉体的、精神的にも様々な変化や経過を辿りながらも私の場合は血縁の繋がりで二神系譜の一員として今日を迎える事が出来、喜びと感謝で安堵の日々を迎えさせて頂いております。

幼少にして父（故二神貞一）を亡くし、初老に入った母と義理の姉の家庭に引き取られながらも少年期を過したのですが、日本を取り巻く世界環境に大きな変化が起こり、当時のアメリカを始め、西欧の諸外国からアジアにおける日本国の富国強兵に対する軍備拡大を懸念され、経済封鎖を余儀なくされるに至り、資源なきわが国としては諸事万端孤立無援の一大事となり、万策尽きて所謂、大東亜戦争と呼称された（第２次世界大戦）（思想として八紘一宇、大東亜共栄圏の確立）に突入する。その後、敗戦の色濃い1945年１月、母や姉そして祖国日本を守り戦場で死す事は男子の誇りと18歳にして海軍に志願しその後すぐ横須賀航海学校に再入校した。信号科予科練習生として帝国海軍軍人としての死に赴く旅への猛訓練を日夜受けながら、その間に起きた大阪大空襲の大火を機縁としてたった一人の母を戦火の中で失いました。（遺影も遺骨も焼失）親孝行らしき事も出来ず、死に目にも会

えず、たった一人の息子を軍隊に取られたままの母の気持ちを思うとき、今尚、断腸の思いがあります。

現在、新聞紙上や、その他の報道で靖国問題、侵略問題、植民地化問題等、極東軍事裁判、その他、あること無いこと、様々な評価や、論評がなされていますが、当時未だ紅顔の美少年であったであろう私に取って見れば、純粋に忠君愛国、死は鴻毛より軽く、日本と言う神国を本当に神様が造られたものと、蒙古襲来時の神風を期待し、靖国の社に祭祀される誇りに純粋無垢で疑う余地も無く、国の為に死する事は日本国、男子の本懐とかたくなに信じておりましたのは事実です。

その一途な純愛、純真な心と、肉体が向かっていた大きな方向や指針が、敗戦を機縁として惨め、無残にも否定され、破壊され、２度と立ち上がれないぐらいに叩きのめされたのも事実です。基準や規律や方向、目標等、指針を失えば荒れ狂う嵐の海原に翻弄され、舵さえ取れない難破船に等しく、何もかもが一瞬にして消滅したままの、放心状態でありました。

戦争は「勝てば官軍、負ければ賊軍」の諺通り昔も今も不変の哲理だと現在でも痛感しております。この章は、失われつつある60年の過去の表現、字句等をこれからの方々にも理解して頂きたいと、古きよき時代の哲理や、道理、真理、諺、親子、家族や家庭の絆、躾や、教育、師弟愛、人間愛等々、失って欲しくない日本人として、人間としての生き方、身の修め方等を、心の底から念願していますが、「覆水盆に還らず」と言う悲しい社会にはならないで欲しと、老婆心ながら心を痛めております。

現在の日本は、物質文明と先端技術、そして飽食の時代に恵まれ、溢れんばかりの物質と情報とに囲まれ、使い捨て、環境破壊や、廃棄

の悪循環を繰り返し、社会的には情操とも言われた人の道、哲理等、昔からの人間らしさや日本人らしさの片鱗すら見かけられないぐらい、殺伐とした不安定さや、無差別、無分別の凶悪犯罪等の頻発、情操不在の異常な社会環境になりつつあるように思います。

人として不文律であっても社会的には、内面的な規律、世間法が受け継がれ、語り継がれてこそ、親から子への躾や、情操教育が存在出来たのではと？　命を掛けて戦場に赴き、後に続く後輩を信じ、国の安泰を願って散り去った多くの御霊は、現状の日本国を見て、血涙を流して後悔されているように思われます。

敗戦時の詔勅に、耐え難きを堪え、忍び難きを忍びとありましたが、戦後60年も経過した今日、改めて敗れた国の惨めさを噛み締めながら、悲しくもあり、戦後の人間教育の指針や根幹を誤った為政者や、教育者に対して強い怒りと、再度猛反省を求めたいと思う次第です。

この章は、伝統ある二神系譜の皆様の中でも痛感されておられるお方もいらっしゃるかと存じます。言い伝えることもむなしく、又、言い伝え諫言する事に対し、聞く耳を持たぬ雰囲気や、世相の中、敢えて戦後60周年の経過を振り返り、年老いた我が身の青春時代を戦前、戦中、そして敗戦後から今日まで、故郷と血縁、歴史と伝統の家系、自分は誰かの放浪記と併せ、語り継ぐ人も少なくなり、史実も霞のように薄く霞んでしまいそうな不安も感じますので、敢えてご叱責もあろうかと思いながらも、海の民、二神の一員として民族の伝統と憂国の念抑えがたく、書き留めさせて頂きました。

私の好きな小学唱歌は、「われは海の子」、ウサギ追いしあの山、「故郷」、「蛍の光」です。

「敗戦、戦後処理、復員、帰郷の列車の中で」

「終戦」と言う字句が格好良く、体裁を整えた表現として普遍化している昨今ですが、短期間とは言え、戦列に志願した体験から言えば、「敗戦」と言う現実の表現の方が忠実度の高い実感として正しいのではと思う次第です。

無条件降伏を宣言してより、国の内外において戦後処理がなされ、多くの戦争指導者や、犠牲者が処刑され、悲痛極まりない処置、処断がなされた。私の場合、敗戦の事実を実感したのは、当時、海軍艦船として所有していた爆雷や機雷を占領軍に引き渡すに偲びず、周防灘から豊後水道の中間点、大分県姫島の沖で海中投棄、爆破させ、艇長以下全員が無念の涙を流しながら夜を徹して作業を続けた苦い思い出があります。
（巨大で無数の鯛やその他の魚が口から浮き袋を出して浮揚してきたのを今でも記憶しています）

その後、多少の時間、期日を置いて、防備隊編入を余儀なくされ、（現在の海上自衛隊の前身、警察予備隊の前身）現在の周防灘から伊予松山沖や、瀬戸内近海、豊後水道一帯に投下敷設された敵味方の機雷、爆雷の掃海任務に強制従事させらました。
（自分の父の故郷近くであるとか、二神島や二神の系譜を継がれておられる方々の存在がいつも近くに現存していることすら思うことも予測することも当時は全く知らなかったまま、戦後処理の掃海作業に明け暮れていた）

この頃は、戦争終結直後でもあり、掃海任務の過程であっても、自船が蝕雷したり、爆死しても、戦死ではなく、当然、靖国に祭祀されると言う確たる証明も説明もないまま、国家としての機関や、統制、

所属も体裁も整えられず、万一、蝕雷、爆破、事故死しても犬死となるように考え、一日でも早く、拘束から逃れ、帰郷したい思いに駆られた日々でもあった。

1946年春３月、やっと除隊を許され、復員する為の列車に乗車する機会に恵まれたがガラスも破壊して殆どなく、夜行の車内は寒風が舞い上がる地獄の寒さであった事は、今でも記憶から消えない。途中、糸崎駅で終点停車となり、やむなく駅周辺の焼け残りの旅館で一泊、翌日、汽車を乗り換え、帰郷の途に就いたのだがその車内で偶々居合わせた人々と会話するうち、朝鮮、京城の二神さんはよく知っていると言う方に出合い、現在の福岡県、筑紫野市にお住まいの会員、二神惇實氏のお父上、故、平蔵氏と私自身が従兄弟の関係にあると言う事を初めて知ったのも奇しき縁の始まりであった。

亡き父の故郷が四国伊予であり、御墓も立派なものが建立されているよと言う事は、幼い頃から母方の親戚、身内の者からよく聞かされてもいたが、なにせ、戦後の混乱期、食う事と、寝ること以外に何一つ希望も夢も持てない全面焼け野原の大阪の地で独り、孤独の身では所詮、どうしょうもない放浪の日々でもあった。

「放浪の記」

義理の姉とも、食べる事では何度も喧嘩をしたが、ある日、思い切って、従兄弟である福岡の二神平蔵叔父さんの許に居候をお願いして生活の面倒を見て頂くことにした。

お元気な間には二神の先祖や、家系、伝記等、そして今、系譜研究会で探求されている各、二神の家系のお話もお聞きした記憶がございます。その恩義ある叔父さんも帰国以来のご苦労が災いしてか、数年先にはお亡くなりになられたとお聞きし、後日、現住所に居を移してから、墓前にお参りさせて頂いたのがせめてもの慰めになってしまい

ました。
（年齢が親子以上に離れていた従兄弟同志で私は叔父さんや、叔母さんとお呼びしていました）現在の系譜研究会、二神惇実氏は私にとって實の兄貴のような存在であり、なにかがあるときでもいつも私を庇って頂いた思い出は、今でも懐かしく感謝しています。

それ以来、数々の放浪体験記がありますが、母方の従兄弟従姉妹とは深い付き合いや、行き来も少なく、家庭的に恵まれていた母方の姻戚より、父方の四国松山、伊予の地が心の中では思慕の念、捨てがたい郷愁となり、いつかは必ず、訪ねて見ようと心に固く決めておりました。

若年にして所帯も持ち、尋常高等小学校卒の負の意識から夜間専門高校の門を叩き、なんとか無事に卒業出来たことから、電子工学系、営業技術者の道を選び、新しい人生を切り開く機会を得られた事も、大きな転機となり、今日の自分を迎えるチャンスともなり得ました。

ある時、東京勤務、在住時代に縁があって、四国出張の機会があり、事情を説明して２日間の現地休暇を取り、故、父の本籍（私が出生した時、兵役時本籍地に編入されるのを避けて私自身の戸籍は現大阪市中央区に転籍した由）愛媛県温泉郡小野村大字平井一番戸と言う原籍だけの記憶だけを頼りに、この小野村役場を訪ね、事情を説明し、原本戸籍まで調査をして頂き、近隣の寺院や、最終的には平井町の、現、二神　俊一副会長の母上に当たる、千代子叔母様との始めてのご面談が叶いました。生まれて初めて自分の血縁、亡き父の故郷を目にした時、回りの道草までもが愛しく、感無量の心境でありました。

平井町のお寺にあった故、父（貞一）と並んで彫刻されていた故、母（いく）の立派なお墓に生まれて初めて墓参させて頂くことが出来

ました。平井町の千代子叔母様が、「この墓は貴方のお父様のお兄様お二人が京城からわざわざお越しになられて建立されたものですよ、」と教えて頂きました。大阪での父が貧しい生活と戦っていたのと若くして逝去した事から不憫を掛けて建立、供養していただいた様に伺いましたが、亡き父の骨や、遺品は入っておりませんでした。その後も長い間、千代子叔母様に甘えたまま、毎年、ご面倒をお掛けしてまいりました事、大変有り難く申し訳ない事と心からお詫び致しております。

千代子叔母様にはこれからもお達者で、松山での最高齢者として、百歳以上のお元気な叔母様としても、教育者としての大先生でもございますので、ご健勝でご多幸の日々をお送り頂きたいと願っております。

幼い時に父を失い、孤独に近い放浪と苦学も重ね、その後、小さいながら、ベンチャービジネス企業として独立し、わが国の環境科学の中でも計測の基準作りに専念出来たことや、湿度全般の計測制御や、世界でも初めてと言われた標準定露点発生装置の開発と製造、販売を多くの諸先生方や理化学研究所の先生のご支援指導を受けて、完成させ、東京、大阪を拠点に全国の大手企業、国立研究機関、大学、試験所を対象として納入させていただいた現役終盤の日々、リタイアするまでの16年間が一番やり甲斐のあった私の人生での最終の花道でした。

現在、特に本年に入ってから、体調にも多少変化が起こり、入院手術を受けたばかりですが、一応、元気さだけは取り戻しておりますのも、海の民、海民スピリッツの血を頂戴しているお陰か、小型船舶１級操縦士、スキューバダイビングと水中撮影を楽しみに沖縄の海をこれからも潜る事ができたり、楽しんだりしたいと思っております。

第一回の二神島総会では体が震える程の感激と、此処に今お集まりの皆様全員と、ＤＮＡの繋がった血縁であることの実感の中で、感涙に咽びながら、やはり、私も海の民、海軍時代も終戦処理の掃海艇勤務も、現在でも、海との関わりが繋がっていたように思います。

今後は、二神島の記念碑建立や、二神水軍、二神記念館のような歴史を継承する、建造物の完成が実現出来ますよう、祈りながら、夢を見る楽しみも増えてまいりました。

二神系譜の一員として末長くご指導、ご厚誼の程、宜しくお願い申し上げます。

平成17年（西暦2005年）８月15日、大東亜戦争終結、日本帝国敗戦後60周年の記念日を迎えるに当たり、これを記す。

元、横須賀海軍航海学校信号科予科練習生
二神系譜研究会、松山市　畑中系譜　二神末次三

此の写真は、私18才、旧海軍志願兵として入団が決まってから、当時、顕在であった母（イク）に残した遺言的な写真です。自分の衣髪と、爪の一部を添えて死を覚悟の上、出征しました。肩からタスキにかけているのは「日の丸」国旗です。

~戦争体験~

キノコ雲と終戦

二神　浩三

1．キノコ雲

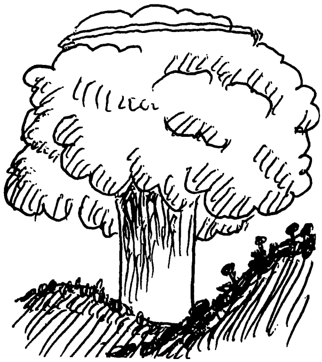
あの日から60年が流れ去ったと云うのに、今も鮮明に浮かび上がるのは、1945年8月6日の広島上空で炸裂した原子爆弾による「キノコ雲」である。

太平洋戦争の戦線も日本本土に近付き、制空権も制海権も米国に握られ、毎日のように警戒警報や空襲警報のサイレンが鳴り響いていた。あの日の朝も、雲一つ無くぎらぎらした太陽の下に、平常通りの課業が行われていた。

江田島の湾内には、油がなくて出撃出来ない軍艦が、あちこちに停泊し、南方海域での戦闘で傷ついた船体を休めていた。軍艦の汚物は海中に排出されるのが通常である。その湾内で、遊泳訓練が行われていたから、海軍兵学校生徒と雖も2～300人のパラチフス患者が発生、急遽柔剣道場が隔離病室に宛がわれた。私も疑似パラチフスと診断され、患者の一人として道場の住人となっていた。一般の健康な生徒とは異なる課業日程により道場に並べられた机と椅子で、自習中であった。その道場の窓からふと外を見上げると、東から西に向かって一機のB－29（米国の誇る4発の重爆撃機）が白い飛行機雲を引きながら、音もなく飛んでいた。警戒警報が出ていたように思うが、空襲警報にはなっていなかった。机の上のノートに何かを書いていたのだが、何の前触れもなく、いきなりノートも周辺も同時に目の眩むような閃光に包まれた。それは昔、写真を撮るために発光させたマグネシゥムフラッシュの光にも似ていた。

ドキッとした時、誰かが「伏せろっ！」と言って、皆一斉に机の下に身を沈めた。ややあって、「ドーン」と云う大きな爆発音が続いた。と同時に机の上のノートが、爆風とともに飛ばされ、床に散乱した。江田島の海軍兵学校は、広島の中心部から約15㎞あり、爆発の光を感じてから、爆発音が聞こえるまで約45秒要することになる。

ノートを拾い上げ、自習の態勢に戻り、何となく窓の外に眼を遣った時、北の方角（広島の方向）の山の端から、ムクムクと白い煙が立ち上っていた。その煙の真下には、丁度、キノコの茎のような真っすぐな、暗紫色と云えば良いのか傘の部分とは異なる色の煙が勢いよく立ち上って行く。その煙が上部で周囲に開きながら下降し、次々に傘の下へ巻き込まれ、太陽の光が当たらなくなると白から紫へと色を変えて行く。また、傘の上部には、かなりの速さで上昇するために、空気中の水分が圧縮されて出来る鉢巻き状の巻雲が、まるで天人の羽衣を彷彿させるように、その輪を広げていくのが認められた。そのような馬鹿でかいキノコ雲全体が、早い速度で上昇していたが、やがて、その下からどす黒い煙が、広範囲に亘って立ち上がり始めた。その煙の下で起こっていた状況は、山の端に隠れて何も見えず、ただ、これまでに見たこともない形と色の煙の変化する様を、茫然と見取れていた。兎に角、とてつも無く大きな爆発があったとしか考えられず、大竹の燃料庫が爆発したのではとか、どこかの弾薬庫が爆発したのではないか、などの憶測が乱れ飛んだ。しかし、その日の夕刻、広島、呉出身の生徒は急ぎ帰省して状況を報告するよう命令が出されたと云う噂が流れ、夜になって、兵学校から広島へ調査に行かれた教官から、広島に投下された米国の新型爆弾は、「原子爆弾」の可能性が高いことが報告された。



窓一杯に広がったキノコ雲

翌日、白い木綿の手拭大の布が、全員

に配布され、以後空襲警報のあった場合には、必ずこの白布を頭に被り、防空壕に退避するよう達示があった。これは広島での被害状況から、絣を来ていた人の紺色の部分は火傷を負い、白い布の部分は火傷を免れていた実情から採択された応急対策で、流石は海軍だなどと、変な誇りを感じたりもした。当時日本の核物理の権威であった仁科芳雄博士が東京から広島へ急行し、原子爆弾であると発表したのは、それから２～３日後のようである。

その頃、広島は、死傷者27万人に達し、阿鼻叫喚の地獄絵の中に置かれていたと思われるが、広島の情報は一切外部には伝わらず、江田島ではそれから数日、常と変わらぬ日課に追われていた。

８月８日にはソ連が、日本に宣戦布告し、９日には当時の満州において進攻を開始し、９日にはまた、米機が長崎に原子爆弾を投下し、ここでも多くの市民の死傷者が出た。

２．終戦

８月15日も暑い真夏の太陽が照りつけていた。正午から天皇陛下の玉音放送があるとの情報は早くから世間に知らされ、兵学校でも、生徒は新しいストッパー（越中褌）を身に着け、前代未聞の玉音放送を拝聴するよう達示があり、一般の健康な生徒は、生徒館の自習室またはその前で、道場の住人は自習室で緊張した面持ちで一語も聞き漏らすまいと両耳に全神経を集中させた。しかし、雑音の多い放送で、何を言っておられるのかが、はっきりしないまま終了した。ただ、悲壮感溢れる抑揚で「堪え難きを堪え、忍び難きを忍び―――受諾の止むなきに至れり―――」などの一部のお声しか判別できなかった。ソ連の参戦に対する総決起だとか、ポツダム宣言受諾だと言ったように、まるっきり異なる内容で一時ざわめいていた。しかし、どこ

海軍兵学校生徒時代の著者

で聞いてきたのか、ある１号生徒が「日本は敗れ、無条件降伏し、ポツダム宣言を受諾したのだ。」と涙ながらに報告した。皆一様に涙を流し、万感胸に迫るとはこう云う様を云うのであろうと思える状態に陥っていた。ところが、そんな所へ、生徒館から週番生徒が飛び込んできて、「貴様等は何をやっているか。日本が負ける筈がない。天皇陛下御自ら、国民に檄を飛ばされたのだ。しかるに貴様等消耗は（病気や怪我によって通常の課業に就けない者は、皆消耗と呼ばれていた。）何たる様だ。」と。１号同士で口論が始まったが、別の病室には感度の良いラジオもあり、正しい玉音放送を聞き知っていた者もいたらしく、しばらくして口論も治まった。

午後４時過ぎ、大原分校総員（教官、生徒、定員分隊、看護婦隊、女子挺身隊）4000余名が大練兵場に集合し、終戦の詔勅の奉戴式があり、○○教頭の全霊を打ち込んだ切々たる訓示があった。各員低頭したまま涙を流し、その悲壮な有様は筆舌に尽くし難いものであった。国を護るために、故郷を出、正に命を賭しての戦いに、全員粉骨砕身その場その場で全力を傾注してきた筈である。それなのに、敗戦、無条件降伏と云う、日本にとって嘗てない恥辱の煮え湯を飲まされたのである。

午後２時頃、海軍の戦闘機が２機飛来し、低空でガリ版刷りのビラを撒いて行った。曰く「―――戦争終決のこと、聖断に出ずれば我ら何をか言わん。然れども、こは敵の傀儡たる君側の奸の策謀に過ぎず。帝国海軍航空隊○○基地は断じて降伏を肯んずるものに非らず。これより本機は、沖縄に突入せんとす。諸子は七十余年の光輝ある海軍兵学校の伝統を体し、最後の一員となる迄本土を死守し、似て祖国防衛の防波堤たるべし。」と（註１）この２機の戦闘機に乗っていた方々は沖縄に到達出来ただろうか。帰ってきたと云う情報はない。多分、何処かの空に散華されたに違いない。

このことがあった後、生徒隊監事Ｈ.大佐から、ビラを撒いた航空隊員のような軽挙妄動は絶対に慎むべきであることを懇々と諭された。

隠忍自重を訴えた生徒隊監事の真意が生徒には十分納得出来た。(註２)

８月16日午後１時頃、特殊潜行艇３隻が本校の沖から大原の表桟橋に向けて突き進んできた。抜刀した青年士官が甲板上で大声で何か叫んでいる様子であり、岸壁近くの生徒が海岸に駆け寄って行った。「生徒は海岸に出るな。引き返せ」と繰り返しマイク放送があったが止まらなかった。「出るな」と叫ぶ教官の目にも涙が流れていた。また、８月18日には指令塔に菊水のマークをつけ八幡大菩薩ののぼりを立てた潜水艦３隻が江田島湾内を回航し、白鉢巻き姿の乗組員が抜刀した日本刀を振りかざしながら、悲痛な声で徹底抗戦を呼び掛けたが、生徒は、礼儀正しく、冷静に答礼ををしたのみであった。(註３）終戦の詔勅が公布された時には、以上の他にも色々な取り乱した行動が見られたものの、日一日と平静さを取り戻し、身辺整理に気を紛らしていった。しかし、心の拠り所を失い浮草同然の精神状態の中では、何も手に付かないでいた。そのような時に、道場のある１号生徒から「やがて、連合軍が江田島にも上陸してくるに違いない。その場になって慌てないよう、今の内に遺書を書く準備をしておけ」と云われた。当時米軍は航空機からビラを撒き、「職業軍人はこの世から抹殺する。」と繰り返し宣伝していた。我々生徒は紛れもなく職業軍人である。連合軍が江田島にやってくるのはそれ程遠くない日であるに違いない。我々は捕らえられ、抹殺されることになる。我々は真剣にそのような最悪の予想も肯定的に捉えざるを得なかった。

さて、遺書となると、日記を付けるのとは全く異なることに気が付いた。先ず自分の生い立ちから思い起す。小学校時代には日支事変が勃発し、出征兵士の見送り、戦死者の遺骨の出迎え等に始まり、日に日に、戦争への準備が整えられていった。そして中学２年の12月８日には太平洋戦争へと突入していった。

父から、男の子が４人もいるのだから、１人位軍人になって貰いたいと嘆かれた。そのようなこともあって、私は中学１年と２年の時に陸軍幼年学校を受験したが、胸囲、体重ともに合格ラインに達せず、

不合格とされ、悔しさの中で、毎日学校から帰ると、近くの農業学校に行き、鉄棒を友として自ら身体を鍛えることに専念した。3年の夏、道後温泉で、見知らぬ小父さんに、「ええ身体しとるのお！」と、いきなり背中を叩かれた。自ら鍛えた身体である。本当に嬉しかった。当時は身体が貧弱な者は非国民とまで蔑まれたのである。

学校での教育は、戦争美化の一途な教育のみがなされ、国の為に命を捧げるのが唯一の生きる道と教え込まれ、国の方針を批判出来るような教育は何一つなく、世間全体がこのような思考で凝り固まっていた。そうした考えに従えない者は、これまた非国民扱いで、投獄されるか、国外に逃亡せざるを得なかった。

ところで上の遺書に戻ろう。やっと念願の海軍兵学校に入校し、もう少しで海軍士官として国の為に、艦船か航空機かに搭乗して戦い、国のご恩に報いることが出来ることを念じつつ、これまでの厳しい訓練に堪えてきた。満18歳と11ヵ月である。世間に対し、報恩の誠を尽くせぬ不忠者であり、両親に対し、何の親孝行もなし得なかった不孝者である。両眼から流れ落ちる涙にインキが滲み、次へ筆を進めることが出来なかった。しかし、兵学校からの帰省措置が早かったため、この遺書は結局日の目を見ないで煙となった。連合軍の日本本土上陸が近付くと、教官も生徒を連合軍に引き渡すことは避けねばならないとの思慮の下に、早く各自を故郷へ帰すことが急務と「生徒を休暇名義で帰省せしむ」旨の達示を出した。

大原分校では、久邇宮邦昭王殿下（生徒）が先ず最初8月18日に離校された後、連合軍の上陸が比較的早いと考えられる四国組を第一陣として帰省することとなり、四国組はカッター数隻に各自の荷物とともに分乗し、内火艇に曳航されて愛媛県北条港に上陸し、国鉄を利用して三々五々各地へと帰っていった。

8月22日に、本校では練兵場で閉校式が行なわれ、H.教頭は「“諸子よ、強く生きよ”今や諸子が前途は多難なり。諸子が今まで兵学校において得たる剛健なる身体と、強固なる信念とをもって諸子が前途

の艱苦に莞爾として耐えよ。最後に言う。“諸子よ、強く生きよ”」（註４）と云う骨子の訓示をされた。生徒達は、生徒館の菊のご紋章に挙手の敬礼をして最後の決別をした。このようにして、８月24日までには懐かしの江田島に別れを告げ、赤茶けた船腹を出し、主砲を空に向けたまま、静まり返った艦船の骸を横に眺めながら、各自故郷の家路に就いた。国敗れて山河あり、しかし、見渡す限りの焼け野原、路無き路をわが家へと辿り着く。父母兄弟に顔を合わせ、生きていた事の幸せを喜んだものの、どう云うわけか、涙が滲んだ。

一体この戦争は、何だったんだ。戦いの前に思いを巡らせば、日本の歩んできた道は、私達の生まれる前から、戦争を目指していた。米英の日本に対する経済封鎖により、止むに止まれぬ対抗措置と云えば、如何にも理に叶ったように聞こえるが、真実はさにあらず、国民にマインドコントロールを掛け、一方向の思想のみを押しつけてきたのは誰なのか。現在どこかの国では未だに「将軍様」がいて、完全にマインドコントロールが掛けられているが、国民は知る由もない。

私達は職業軍人として戦争に参加した。その結果はどうだったのか。どの国も大きな損失を余儀なくされた。戦勝国も戦敗国も、ともに多くの死傷者を出し、多くの資源を無駄に消費し、食糧も底をつき、多くの餓死者を出した。戦争を知る者は、二度と命を懸けた戦いに挑もうとは思わない。

もう、終戦の年から60年が過ぎた。平和であることを歓びたい。

参考文献

（註１）海軍兵学校第76期史　Ｐ.71
（註２）海軍兵学校第76期史　Ｐ.71
（註３）海軍兵学校第76期史　Ｐ.72
（註４）海軍兵学校第76期史　Ｐ.74

特集② 豊田氏慰霊の五年祭

二神氏のルーツを訪ねて

広島市在住　二神　種昭

この度、二神英臣事務局長より先祖の地を訪れた経緯について記述するよう依頼がありました。

はじめて先祖の地、山口県の豊田の地を母・澄恵、弟・種弘、小生の三人で訪れたのは、昭和四十九年でした。この経緯について語れば長くなり、また個人的内容を含み、公表すべきか否か苦慮いたしました。しかし、今回、ありのままの事実を皆さんにお伝えすることが大切であるとの認識の下に、以下に述べることにしました。

その契機は当時、兵庫県豊岡市で神業をされていた小長谷章夫氏を訪れた際、次のような神文が垂示されました。

・龍華(ゝ)之神文　　　　　　　　二神　種昭　様

「霊(たま)と血のもとの道筋たどり行け、本清まれば末、清し、ここが思案のしどころと心迷わすことはない。すでにえにしの流れにのりて裏の国なる豊岡に流されて来た身にあれば表を飾ることもない。その場だけの繕いは何時しかはげると云うものなり。

まことの玉の光と云うもの、その神にも等しき輝きを己が身の内に見つけ、又人の内にも見つける為に茲へ参らせた。その裏の仕組みと云うもの理屈で判るものではない。理では判らぬその事は、素直となりて解いてみよ。

今より一段と真より豊かになりて、このしばらくの後大事な御用に

立ちたいものなり。一つ大きな切り替えの橋渡しなり。
外から得た智恵学問のその奥の、まことの魂の目ざめによる神智妙智の神念と云うもの育てたいものなり」

吾は宝光みろくなり　　　　言　霊　神　鳴

かつて、山口で兄と父が亡くなりました。兄は九歳の時、ジフテリアで病死。父は佐賀県女学校に約十五年勤務していたが、山口県大津中学校の教頭先生が、ひょっこり訪ねてこられて本校で勤務するよう勧められ、そこで勤めるようになりました。当時は戦時中であり、光海軍工廠で学徒動員中集団赤痢に罹り、これがもとで病没(享年37歳)。

親戚の者が“先祖が呼んだのだろう”と言う話や、また、子供の頃よく病気にもなり、当時の北条市長で霊能者でもあった得能久吉氏に伺うと、“古い先祖が祭られていない”と言われたことなど母から聞かされていました。

しかし、神示とは言え、仮に彼の地に行っても、“兵どもが夢の跡”のごとく、長年の歳月の経過で忘却の彼方となり、もはや先祖の縁者もなく、ただただ茫漠たるススキのが原をイメージし、行くことに、いささかの不安と、ためらいがあり、躊躇しました。しかし、“心迷わすことはない”との言葉をたよりに、旧大津中学の教え子・上村栄作氏より豊田町の方々に連絡を取っていただき、初めて豊田の地を訪れました。

結果、誠にすばらしい出会いが待っていました。11月3日、雲一つな

父・二神種徳

い晴天の空、大地は稔り豊かに黄金の稲穂が波打ち、まさに、“豊田”の地名にふさわしい光景でした。バスから降りるや、豊田町史編纂委員長の藤井善門先生の出迎えを受け、早速、町差し向けの車に同乗し、豊田氏ゆかりの史跡を委員長はじめ数名の方々より、丁重なご案内をいただきました。昼時には、坂田一正町長以下、豊田町の皆様による盛大な宴が私たちのために準備され、人情豊かな皆様方の厚いもてなしにあずかった次第です。

とりわけ、当時、町史編纂中であった藤井先生は、“自分のライフワークは、中世の豊田氏の研究であり、豊田氏ゆかりの二神氏末裔の方との出会いを心から待ち望んでいました”と熱く語られ、はからずも符節を同じくする邂逅となりました。勿論、私たちは、先生の名も、存在も全く知りませんでした。

先生は豊田史に精通され、中でも、豊田氏の系図に見る、豊田郡大領七代種弘が各地に八幡神社を創建するなど、多大の活躍をされたことをご存知で、同名の弟、種弘の登場は、奇しびなる歴史の符号を垣間見た驚きと喜びに満たされたご様子でした。

このような歓待を受け、さらに皆様の温かいお見送りをいただき、夕刻には長門市（旧大津郡）に移動し、父の教え子数名による宴席を設けていただきました。

父亡き戦後は母の実家である北条粟井に移住し音信不通となり、私たち母子の安否を心配され、何度か松山市古町（本籍地）まで出向かれた方もいたと言う話もありました。この夜は師弟の絆が結ぶ縁で、夜遅くまで歓談。このように、一泊二日の旅は、全く予期せぬ展開となり、深い感動を秘めて終わりました。

その後、藤井先生は故人となられましたが、最も困難な古代・中世の項はご自分の担当で執筆を終えられておりました。後任に安村睹先生が就任され、町史は約千ページに及ぶ大冊として完成し、謹呈を受けました。123ｐの［付記］に、〔昭和49年11月３日、千葉県松戸市居住の二神種昭氏が豊田町を訪れ、一ノ瀬・殿敷の豊田氏遺跡に般若心

経を埋め、先祖の霊に祭文を捧げた。このとき、豊田氏以来の『二神家系譜』を持参していた〕とあり、後日、安村先生にお聞きしたところ、“通常歴史書には、現代の記事は載せないが、歴史は過去を辿り、現代との関わりを知ることが重要である”との藤井先生の意見で掲載したとのことでした。このことが、結果として旅の証となりました。

その後、姉・立住和子（旧姓・二神）・姉の長女・立住若菜も同行しながら、度々豊田に参上し、一ノ瀬のご長老であられた白石簡一様はじめ、皆々様には大変お世話になり、ご厚情に満腔の感謝で一杯です。

かつて、豊田氏が大内氏、厚東氏と共に防長の三大名族として、戦国乱世の中にありながら、豊田の大地で繁栄の日々があったことを知ることができ、後日、“一門の昔栄えし処を見せたいために参らせた”との神示もありました。

今なお、一ノ瀬では、豊田種長の追善供養が、五年ごとに神式・仏式交互に行われておりますことはご承知のとおりです。当初、この祭事をご紹介し、参列された方は数名いらっしゃいますが、感涙を禁じえないようでした。

その中で、愛媛県中島町吉木に居住の二神雄彦氏（故人）は、豊田一ノ瀬の皆様を二神島ほかへご案内され、豊田町と二神氏の絆を一段と深められました。

以前、「ルーツ」と題する映画が話題になりましたが、映画の数年前に、清めの酒・塩・米、書写した般若心経など持参しながら、二神氏の系譜をたどる旅を続けました。

二神島・中島・北条宅並城（二神氏時代）→豊田町（豊田氏時代）、→奈良・飛鳥・平城京・藤原鎌足（中臣）を祭る春日神社・談山神社（藤原氏時代）→茨城の鹿島・香取神社（中臣氏時代）等など。かくして、二神氏の淵源を辿ると、はるか神代に到り、天児屋根命に逢着することになります。もっとも、ここまでさかのぼると、諸説ありで、確たる証拠はなく、神話の世界となります。

ご承知のように天児屋根命は、天照大御神に岩戸からご出現を願って太祝詞言を奏上した御役であり、言わば神主職の元祖と言えましょう。元来、中臣の語源は神と人との中をとり持つ意を含むものです。してみると、二神氏は神縁深い系譜であることが考察されます。勿論、それぞれの氏族が、尊い神縁で結ばれていることは言うまでもありません。

ある時期より、私達の二神家は溝田家の神主職を曽祖父まで継承し、祖父有種は、私達の誰かを神主にしたいと言っていましたが……。

以上のような経緯で、二神氏のルーツをたどり資料を持ち得たので、小生、千葉から広島へ移住するに際し、東京国分寺市在住の二神康郎氏の協力を得て、急遽、関東の二神氏に呼びかけ約20人が集い、資料として「中島町史」「豊田町史」「日本神話と藤原氏」「鹿島神宮」の抜粋コピーをお渡しいたしました。「瀬戸内海」(朝日新聞社編)掲載の康郎氏執筆による《二神島探訪》の二神氏の連帯の項は、その時のものです。(なお、「豊田町史」「瀬戸内海」は松山市北条のふるさと館に寄贈いたしております)

その後、機会を得て本拠地愛媛での集いを願っていましたが、折りしも、二神重則氏の発案による二神氏の会が発足しました。重則氏は父親が従兄弟どうしになるとのことで、血の近さの不思議さを感じております。二神系譜研究会により、二神氏の動静が次々に解明され、連帯の絆がより強く結ばれている現況は誠にすばらしく、発案者の重則氏をはじめ、二神浩三会長・二神英臣事務局長・関係各位の大変なご尽力によるものと拝察しております。そして行き着くところは、“像を造りて魂を入れる”のごとく、将来、二神氏に縁ある者の合同慰霊祭が執り行われることを希望し、その旨、関係者にもお伝えしております。

ひるがえって、わが国は神代の昔から神や先祖を祭り、生命の道を継承してきた国柄であり、今、再びその本源に立ち還る時節を迎えているのでありましょう。

ともあれ、栄枯盛衰の歴史の潮流の中で、豊田の大地、そして瀬戸内を舞台に中世を駆け抜けた豊田氏・二神氏の先祖に深甚なる敬意を表するものであります。

なお、同封の曲《瀬戸の海》ＣＤは、小生の作詞／作曲・歌による拙作です。今、瀬戸内海は歴史の恩讐を越えて三橋時代を迎え、新しい時代の幕開けを告げています。かつて、先祖等が戦いに明け暮れた海。厳しい生活の糧を得た海。それ故、現代の私達以上に愛着した瀬戸の海。激しい戦いと苦しい労働の合間に、ふと安らぎをおぼえたであろう海。ひねもす春の海！　瑠璃色に輝く海！

時は流れ、今、時空を越えて共有する瀬戸内の悠久のロマン！

末筆ながら、当会のさらなるご発展と皆様のご健勝を心よりお祈り申しあげます。

＊　上記《瀬戸の海》は《広島の心》を加えたＣＤを自主製作、拙作ながら最近インターネットで公開しましたので聴くことができます。

http : //www.geocities.jp/taneaki40

右折して先祖の地に入った

関西支部理事　二神　大輔

05年度総会を兼ねて第二回種長追善供養祭に参加すべく豊田に向かった我々16名は、山陽線小月より宿泊予定ホテル差回しのマイクロバスに乗り込み、豊田に向かった。長門へ向かう国道を経て県道34号から豊田町手洗いで右折して一路先祖の地豊田館跡へ向かう。

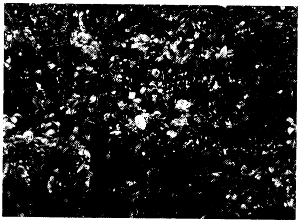
右折した途端、沿道の風景が一変した。それまで国道や県道沿いに無数に立っていた営業用立看板が一枚も見当たらない。すでに数十年前に失われた日本の原風景だ。

汚されていない、かっての日本の姿をそこに見た。身内から沸き上がる喜びに浸りつつ種長供養碑へ寄り館跡へ到着した。

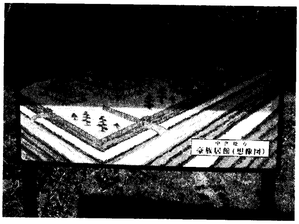
600余年の間、世の栄枯盛衰を眺めてきた御神木のような椿が、満開の花を咲かせて我々を迎えてくれた。わずか70～80才の我々にとって、その御神木は傲然とそれでいて何故か優しく、暖たかく、豊田の末裔を迎えてくれた。

館跡は地元の皆様の御奉仕により史蹟公園のようである。

豊田に対する愛情と誇りを感じさせていただいた。椿のそばには、町教委作成の椿の由来と館の図面（想像図）が立てられている。



満開の館の椿



館の図面

御神木のような椿

一の俣ホテルでの総会次第は他の人に譲って、宿泊したホテル周辺の事を報告しよう。

実に気持ちのよい睡眠をとった翌早朝、従業員様のご好意で正面ドアを開けて頂きホテルを一歩出た途端、爽やかな春風が私の全身を包んだ。

それは、すぐ傍を流れる澄んだ清流に冷やされた本物の空気だ。

そうだ、これが空気だ。思わず叫ぶ私。京都のコンクリートジャングルの中、止むを得ず、空気とも言えぬ空気を吸い続けてきたここ数十年………この空気を吸いたくて、先祖の地に来たのだ。

何度も深呼吸をし、すぐ傍の渓流に降りて、両手にすくった川水を何のためらいもなく口に運ぶ。おいしかった。

浄めてくれた。一杯の川水が！

数十年来の都会の汚れを。この空気！この水！やはり先祖の地は私を裏切らなかった。

渓流にそって約１時間散策する。

我々の到着を待っていたかのような満開のソメイ吉野を恨めしく見上げる。

同行した他の15名の仲間には悪いけど、私にとって「パット咲いてパット散る」ソメイ吉野はまさしく軍国日本の象徴だ。従って戦後60年、この季節になると私はいつも恨めしく空を見上げて来た。

その桜が先祖の地で春を謳歌している………ま　喜んでいる他の仲間のことを思って我慢するか!!

木蓮よありがとう!!

ホテルの上流約200m位の山際に一軒の農家があり、その庭に　１本の巨木が辺りの桜を睥睨して枝もたわわに満開の花をつけている。名も知らぬその花の下に吸い寄せられた。

その農家のオバチャンに名前を教えてもらった。木蓮といった。

嗚呼これが 木蓮 か!!

ソメイ吉野によってせっかくの先祖の地が汚されているのを悲しんだ私の心はすっかり反転した。

やはり先祖の地だ。だけどこの木蓮がなかったら………

４月という季節がら当然予期した事だっただけに私の心は、桜により傷つけられたままだったに相違ない。木蓮よありがとう。

10時前にホテルを出発した我々は、一路供養祭参加の為に種長供養碑へ向かう。到着した我々を迎えてくれたのは、我々とほぼ同数の地元の皆様と、地元テレビのニュースカメラ数台であった。

折からの強風の中、仏式で供養祭を終えた我々は地元史家のお話を約30分聞かせて頂いた。

雨よ降れ!!

地元史家のお話の中で印象的だったのは、数年前に家族一行で豊田を訪問したどこかの二神氏の話であった。父親が子供らにむかって、「うちらの御先祖様はこんなに偉い人だったのだからおまえ等も頑張れ」というのを聞いて思わず目頭が熱くなった。との事である。

なるほど！なるほど！

供養祭の後、公民館に集まり昼食の供応をいただく。何とも言えぬ暖かいおもてなしである。

田舎の人なればこそ、豊田を尊敬している皆様なればこそ、のおもてなしであった。

その昼食会の間、私は時々外へ出て回りを見渡す。公民館の近くには清流が流れており………（そうだ、これが蛍の里だ。)………その清流を高くない里山がすっかり囲んでいる。

途端に私の心の中に、ある風景が鮮やかによみがえる。「もし雨が降り、この清流の上から里山にかけてモヤがかかったら………」まさしく南画の世界だ。子供時代四国の山の中でしばしば見た風景と重なり合った。

雨よ降れ！

昼食会の席へ出たり入ったりしながらひたすら降雨を願った。

雨降るな！

と思っている仲間の期待を無視して、私のみひたすら雨を祈念した。

アララフシギ！３時の出発を前にして、２時頃からポツリポツリ雨が降ってきた。一時はかなりの降雨になりその内、望みどおり清流から里山にかけての一面がモヤに包まれ南画の世界と化した。

言うことなし！

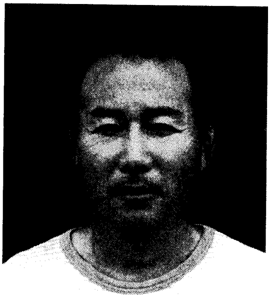
ちなみに、地元を出発した時はまだかなり強い雨だったのが、山陽線小月駅に到着した時はほぼ晴れていた。右念のため

関西支部出席理事（左）二神久蔵（中央）筆者二神大輔（右）写真撮影二神宏介各氏

地元の皆様と

豊田種長追善供養祭に参加して

（中西二神氏）二神　博文



桜が満開の４月10日初めて豊田種長追善供養祭（５年祭）に参加しました。当初、案内のハガキを頂いた時は松山市（旧北条市）から山口県下関市まで行くのは、ちょっと遠いかな？と言うのが正直な気持ちでした。しかし、私にとって今年は特別な年でした。というのは新居の二世帯住宅が今年三月に完成したばかりで、これはご先祖様のお陰だという気持ちがあり、５年祭には報告とお礼を兼ねて参加しようと決心しました。今年行かなければ次は５年後という事も参加を決めたひとつの理由です。

今年2005年の５年祭は650年祭という事でしたが「豊田氏ほどの豪族の墓が荒れ果てているのはよくない」と言うことで明治44年（560年祭に当たる）から我らが先祖のご供養を続けられている事は大変感動的で、一ノ瀬の住民にただただ感謝するばかりでした。

史跡訪問での感想は以外にも山の中（盆地）でした。一ノ瀬の住民のお話によるとイノシシの被害が深刻ということで、ほとんどの田んぼの周囲にイノシシ避けのトタンと網が張り巡らされていました。猿の被害もあるとの事でした。

種世と家督争いに敗れ豊田郷を去った種家が何故まったく環境の違う海に囲まれた二神島に移ったのか？と言う点は大きな疑問として残りました。

二神氏歓迎交流会では、20世帯にも満たない一ノ瀬地区の皆さんに大歓迎をして頂き、別れ際には握手をし「よく来て頂き有難うございます」と何度も何度もお礼を言って頂き大変感動しました。5年後もまた一ノ瀬を訪れたい気持ちになった事は言うまでもありません。

一の俣温泉にて

二神系譜研究会との出会いから５年

二神美知子

私と二神系譜研究会との出会いは、宇佐八幡神社から始まりました。

今から５年前、北条に住んでいる友達に誘われ、宇佐八幡神社に初詣に行きました。父から、北条の風早から余戸に庄屋として移り住んだと聞いていましたので、友達には常々「北条とは縁があるんですよ。」等と話していました。そして、芳名録に名を連ねました。その名前を事務局長二神英臣様がご覧になり、兄の二神信助に連絡があり、兄と共に入会することになった次第です。早いものであれから５年の月日が流れました。

いろんなことが走馬灯のように思い出されます。初めて参加したのは二神氏の系譜を研究するための準備会（2000年３月12日）でした。また二神島現地説明会にも参加。その後第２回二神島交流会、毎年開催される総会、交流会………等など参加しました。

回数を重ねるごと二神氏の歴史も少しずつ分り、また二神さんたちの名前とお顔が分かるようになり、お人柄にもふれ、参加することが楽しくなりました。

昨年、兄より「家系に二神寛治さんは居られたよな？」と言われ、早速帰って父の従弟である二神哲五郎さんが主になって作成された二神の系図を調べました。居られました私達の曾御爺さんである精一の弟に寛治さんが………びっくりしました。また、昔のアルバムがあるので、ヒョットして、残っているのではないかと思い、見てみました。ちゃんと写真も残っていました。アルバムには全部、名前の記入があ

ったので私達が見てもすぐ分かりました。このような情報がなかったならば、寛治さんのお名前をアルバムで見ても、どういう方かも分からなかったと思います。本当に有り難かったです。また斉藤様がホームページを見られてお問い合わせ下さったことなど、二神系譜研究会とホームページのお陰です。これもご先祖様の巡り合わせでしょうか。これから我が家の系図、直系だけではなく、横の繋がりなど調べていきたいという思いが湧いてきました。

今年は、二神氏の遠祖の地「豊田郷」を初めて訪れました。松山観光港よりスーパージェット、バス、電車と乗り継ぎ、お天気にも恵まれ一路、一ノ瀬を目指しました。先ずは小月駅で関西支部の方たちと合流、一の俣温泉グランドホテルの送迎バスに乗り、豊田種長追善供養板碑、長願寺遺跡（豊田氏の菩提寺)、豊田氏館跡、館の椿、東殿（豊田種冶館跡）知行寺遺跡（豊田氏の菩提寺)、西殿（豊田種秀館跡）と史跡をバスで駆け抜けました。「館の椿」は満開でそれはもう見事でした。一本の樹から枝ごとに色の違う花を咲かせていました。樹齢600年以上、その地に佇み、数々の豊田氏の歴史を眺めてきたことでしょう。訪れた私たちに何かを語りかけるような、なんとも癒えない感無量の想いでした。二神氏の皆様にも是非訪れて、「館の椿」を見てほしいと思いました。また東殿（豊田種冶館跡）と西殿（豊田種秀館跡）は、東西一直線上に位置しており、高台より眺めるとその状況は一目瞭然でした。歴史の重みを感じる史跡訪問でした。そして一の俣温泉グランドホテルにて2005年総会を地元一ノ瀬の白石区長をお迎えし開催されました。終了後、和やかな懇親会が始まり、和気あいあいとした楽しいひと時を過ごしました。その後、私たちは一の俣温泉にゆっくりと浸かり、第一日目を終了しました。

二日目、５年毎に行われる「豊田氏慰霊五年祭」(豊田種長追善供養祭）に参加しました。供養祭では雨は大丈夫でしたが、風が吹く中

で厳かに行われました。時折、突風が吹き荒れましたが、ご先祖様達が「馳せ参じたのじゃ」と言っておられるようにも聞こえ、豊田種長追善供養祭の重みをひしひしと感じました。そして場所を移し、交流親睦会も和やかで友好的な雰囲気の中で行われました。一ノ瀬の人達の暖かい心、ご先祖様を大事にされる気持ちが伝わってきました。瞬く間に時間が過ぎ、一ノ瀬の人達との別れも、後ろ髪引かれる思いでした。小月駅で関西支部の方達とも分かれ、私たちは一路松山へと帰りました。

今回、二神氏の遠祖の地「豊田郷」一ノ瀬に訪れることができて本当に良かったです。交流がいつまでも続くように祈りたい気持ちでいっぱいです。これから、1年また1年と二神系譜研究会の歴史が築かれていくことでしょう。みんながいつまでも元気でますます二神系譜研究会が発展することを祈りながら、拙い文章ですが、これで終わります。

平成17年5月25日

館ケ浴の椿を背にして

豊田種治の関係文書について

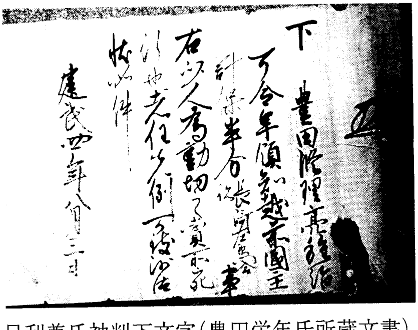
愛媛県歴史文化博物館　石野　弥栄

一

伊予二神氏は、防長三大豪族の一つ、長門豊田氏から派生したといわれている。豊田氏は、著名なわりには関係史料が少なく、その実態はあまり明らかではない。二神氏の祖先の活動を知る上で、まず豊田氏に関する史料を収集することは重要であろう。南北朝期に登場する豊田種治に関する二、三の文書が目に触れたので、ここに紹介し、少しく解説をほどこしてみたい。

二

下掲の【史料１】は、平成13年11月10日発行の「二神系譜研究会速報」No.８に、すでに紹介されている。この文書は、綾延神社（西条市丹原町）の元宮司豊田栄年氏が所蔵されている足利尊氏下文である。この文書の袖（文書の右端）の部分には足利尊氏の花押が据えられて



足利尊氏袖判下文字(豊田栄年氏所蔵文書)

【史料１】
（豊田栄年氏所蔵文書）
（花押影）（足利尊氏）
下　豊田修理亮種治
可令早領知越前國主
計保半分長崎左衛門入道（高資）事、
右以人為動（勲）功之賞所宛
行也、者任先例可致沙汰
状如件
建武四年八月三日

いて、「片山二神文書」に収める同日付、同文のものと異なる。建武年間の足利尊氏の発給した下文には、袖判が加えられているから、前者のほうが原型に近いとみられる。この文書は、実見したところ、筆跡、筆勢、花押の形状、紙質等を勘案すれば、正文ではなくて写とみてよかろう。

【史料1】（足利尊氏下文写）は、足利尊氏が豊田修理亮種治に越前国主計保（福井県福井市）半分（地頭職か）を宛行ったものであり、もと鎌倉幕府の執権北条氏（得宗家）の家政を司どる内管領長崎高資の所領であったことがわかる。それが鎌倉幕府の崩壊にともない、足利尊氏によって没収され、軍功のあった豊田種治に与えられたとみられる。それでは、豊田種治は越前国主計保をいつ頃まで領有していたのであろうか。

【史料2】（足利尊氏下文写）によってそれが判明する。この文書は、「永田薫氏所蔵文書」（東京大学史料編纂所架蔵写真）にも同日付、同文の足利尊氏下文写があるが、足利尊氏の袖判を欠いている。以下、その内容をかいつまんで解説してみよう。

> **【史料2】**（永田一馬氏所蔵文書／東京大学史料編纂所架蔵写真）
> （足利尊氏）
> 御判
> 下　山徒一揆衆中
> 可令早領知近江國音羽庄地
> 頭職并若狭國河崎庄 河崎大蔵左衛門尉（同庶子等跡）
> 越前國主計保 豊田修理亮
> 右為勲功賞所宛行也、者早
> 守先例可配分知行之如件
> 観応三年四月二日

観応3年（1352）4月2日、足利尊氏は、「山徒一揆衆中」に3か所の所領を宛行っているが、この中に豊田修理亮、つまり種治のかつて領有していた越前国主計保（地頭職か）が見える。つまり、足利尊氏は豊田種治らの所領を没収して比叡山延暦寺の衆徒（山徒と通称する）の集団に与えたわけである。ここに見える山徒というのは、学問や仏事を事とする僧侶ではなく、むしろ武力を帯びて比叡山内外

の闘諍の際に活躍した僧である。このような僧は、かつては「僧兵」という学術用語で説明されたものであるが、現在では「僧兵」という語は不正確なものとして使用されない。【史料2】の文書は、「護正院文書」(写)という山徒に関する文書群（永田薫氏所蔵。東京大学史料編纂所架蔵写真）にも収められているので、足利尊氏が梨本(梶井)門跡配下の護正院を始めとする山徒たちに、豊田種治等の旧領を配分、給与したと考えられる。なぜ山徒が室町将軍から領地を与えられるかというと、彼等は比叡山延暦寺の衆徒でありながら、室町将軍に被官として従属していたからである。足利尊氏が建武3年（1336）6月、比叡山に拠る後醍醐天皇方を攻めたとき、護正院らの山徒は、後醍醐天皇方に属して、足利尊氏軍と戦っているのに、金輪院という山徒は、足利尊氏に属したという。『太平記』(巻17・山攻事）に「金輪院一人山徒ノ身トシテ我山ヲ背キ、武士ノ家ニ非ズシテ将軍ニ属シ、剰弟子同宿ヲ出シ立テ、山門ヲ亡ント企ケル心ノ程コソ浅猿ケレ」と見え、当時の山徒の実態を如実に物語っている。室町期には金輪院や護正院らの有力な山徒（大名山徒という）は、「山門使節」と呼ばれ、将軍被官として幕府の命令を叡山側へ伝える役目を担っている。嘉吉3年（1443)、将軍足利義教による山門攻めのときには、護正院兼全は将軍方に立ち、根本中堂に籠った敵方の山徒と合戦し、殊功をあげている（護正院文書写)。だいぶ脇道にそれたので、ここらで豊田種治の立場にたちもどってみよう。彼が尊氏から所領を収公された理由は上掲の史料に明記されていないけれども、観応3年（1352）という年次が手がかりになるように思う。それより2年前に足利尊氏、直義兄弟の争いが勃発し、幕府勢力を二分して互いに戦った。それを観応の擾乱（観応の政変）と呼ぶが、観応3年2月に直義の暗殺により尊氏方の勝利に終わる。直義は桃井氏などの北陸勢を支えとして尊氏党に対抗しているから、越前国の主計保をもつ豊田種治が直義方に属したせいで、観応の擾乱の終息した段階で領地を没収されたのではあるまいか。

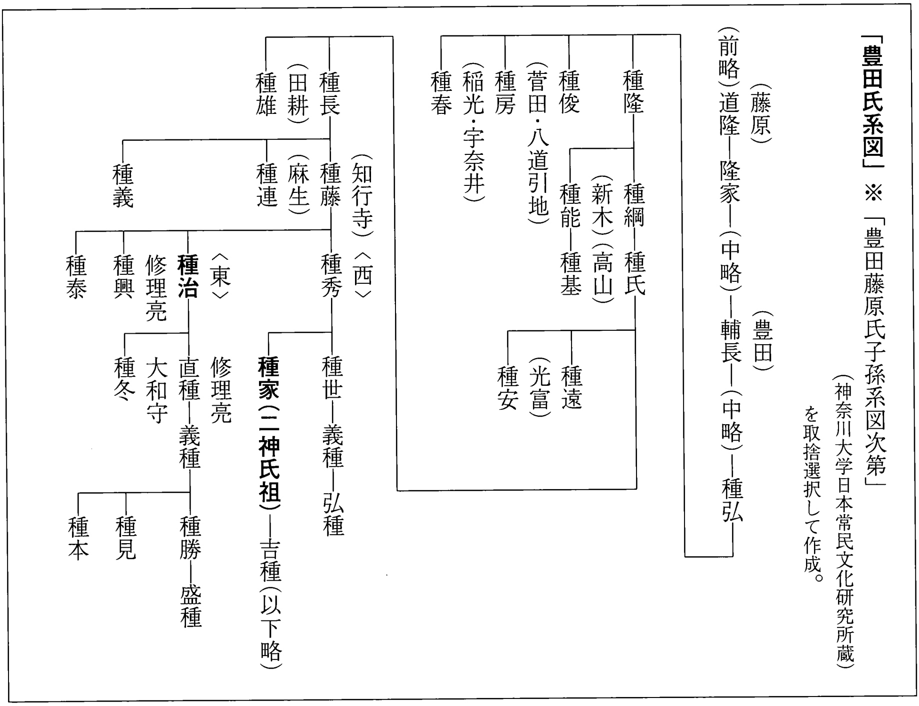
【史料３】（山城妙法院文書／東京大学史料編纂所架蔵影写本）

新日吉社領長門國向津奥庄事、
雑掌申状副具（書）遣之、子細見状、
豊田修理亮号兵粮所濫妨云々（裕々）、不日
莅彼所、來月廿日以前可折渡于雑掌、
令違犯者任事書之旨、可有沙汰之状如件、
観応三年七月廿七日　（足利尊氏）（花押）
厚東（武道）駿河太郎殿

【史料３】（足利尊氏御教書）における豊田種治の動きは、あるいは北陸における彼の基盤の喪失と関連しているのかもしれない。越前国主計保を失ってから約３か月後、彼は新日吉社領向津奥庄（山口県大津郡油谷町）を兵粮料所と号して濫妨した（年貢の強奪か）として新日吉社側の雑掌（代官）から訴えられている。そして、足利尊氏は長門国守護の厚東氏に８月20日以前に豊田種治の濫妨行為を停止させるよう命じている。このときの幕府の命令が実効力をもったものかどうかわからない。ともかく、向津奥庄は豊田氏の本拠地（下関市豊田町）に隣接する地であるから、種治は本拠地近くに勢力を拡大し、失地回復を企てていたのかもしれない。種治にかぎらず、豊田氏一族は南北朝内乱の大きな渦に巻き込まれ、存亡の機に際会していた。この年３月23日、小野三郎左衛門資村は前年11月に将軍方の厚東氏に率いられて光富（城）に立て籠もった敵を攻め、「豊田太郎左衛門種本」を討ち取ったという（『萩藩閥閲録』巻71小野貞右衛門資房）。ここに登場する豊田種本の豊田氏系譜上の位置はさだかではないが、種本が光富城に拠っているから、豊田氏流光富氏（後掲「豊田氏系図」に見える種安流か）ではなかろうか。

九州で少弐頼尚に支えられて反幕的活動をしていた足利直冬（尊氏の長庶子。直義の養子。）が、九州を逃れて長門国に入ったのは、改元して文和元年（1352）となった11月である。その頃、豊田氏一族は厚東氏に対抗して足利直冬方（佐殿方）に立ち、幕府軍と戦っている。

「豊田氏系図」一本によれば、種治の注記に「雖為嫡子落胤之故、不継惣領」とあり、種治は豊田氏惣領にならなかったという。なお、同系図によれば、豊田氏は東西に分かれ、種治は東の系統であったという。



三

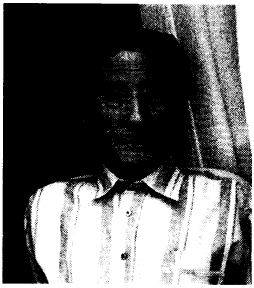
以上、豊田種治に関する三点の史料を紹介したが、それは豊田氏の歴史の一齣にすぎない。豊田種治より前、あるいは後の時代の文書も存在する。例えば、鎌倉末期、北条氏一門金沢貞将の書状(年月日欠)に「長門國豊田千熊丸嘆申旨候之間代官令参上候」とあるが（金沢文庫古文書)、これは種治の先代のものか。また、貞治４年（1365）９月８日「豊田大和守」という者が向津奥庄を濫妨したとして訴えられている（山城妙法院文書)。これは、種治の子息、直種の活動を伝えるものであろう。

研究・調査報告

二神氏と法楽連歌

（この項　平成15年晩夏）

理事　二神　栄三



【海武士の歌】　瀬戸内水軍連歌考

松岡　進　著

一般に参考文献は、書の終わりに載せますが、ここでは当本を根幹としており、あえて、はじめに掲げます。

＊水軍連歌にふれてその在り方を、かいま見たい思いは、上記の本を読みゆくうち、いつのまにか『二神氏の姿』を探し求めることが、主となっておりました。

往古においては『海賊』と呼ばれ、『水軍』の名が使われるのは戦国時代も織田信長のころであろうか。初めて海武士の文字に出会ったときは　エッ　と思いましたが、不勉強の至りでした。

以下は、数百頁に及ぶ海武士の歌の一部を要約引写した、謂る孫引きで【　】で表し、また（P…）の数字はこの本の頁数であり、＊及び（注）は私とします。＊

【本書で取り扱っている水軍連歌の初見、資料の上では、文安２年（1445年）で村上水軍鼎立の元を作った、村上雅房の没した永享４年（1432年）から僅13年後の事で、言わば村上三党隆生期に当たり、姿を消すのは元禄２年（1689年）で、文安２年から実に244年後である。（注　応仁１年すなわち応仁の乱は、1467年）

現存する句は約３万句、本書の紹介するのは、約十分の一の二千余名の作者、中には無名の女性もいて戦線に出て活躍している。】

＊また、女人の絵姿を題とした、あだなものもあります。厳粛である

べき神前でと驚きましたが、ふり返って我が国を見れば『天の岩戸』の昔から、女なくしては夜の明けぬ国、三島の神もさぞ、ニンマリなされた事でしょう。　関話休題

天正４年の石山本願寺の戦いと他の項を若干加え述べてみます。＊

【（Ｐ414）摂津木津川口本願寺へ、毛利氏を助けて兵糧入れをひかえ、大三島神社へ、村上氏は戦勝宿願の万句連歌を奉納。

この連歌興業は天正４年５月に始まり、７月19日に終わる。

水軍８百艘（信長記）の惣軍は７月12日にはすでに、木津川口近くに大船団の姿を表した。

惣軍が出たあとも、三島宮では７月11日、12日…19日まで戦勝を祈る追加連歌が、たゆみなく、歌い続けられていた。】

＊海武士の二神見ずや夏の雲

『二神水軍について』は数ある連歌にそれと分かるものは見当たらず、句作の人物は、名前（名乗り）のみか、又は無名で「著者による名字記入」以外の人々は、いずこの人物であるか判断がつかず、二神氏ゆかりの『種』のつく名に手掛かりを求め、その前後の句と共に書き出してみます。＊

【①（Ｐ436）

浦舟の　霧のまにまに　かようらん　　種守
　まちける夜半の　さおしかの声　　吉昌（村上吉昌）
　　天正４年５月６日　　万句第二

②（Ｐ439）

秋風や　ねこし山こし　しほるらん　　種言
　竹一むらに　かかるうす霧　　吉成（北畠大膳吉成）
　　天正４年５月19日　　万句三第十　何紙

③（Ｐ437）

御祓きする　川なみきよし　秋の風　　　　種良
　ほたるとひきえ　水くるるかけ　　　　通綱（村上助兵衛通綱）
　　天正4年5月24日　　　　　万句四第十　何路

④（P441）

木々に見し　花は太山の　若葉かな　　　　元吉（村上元吉）
　ほとときす鳴く　峯のよこ雲　　　　　吉任
　　天正4年5月25日　　　　　万句五第一　唐何
　　幸成と種言、秋江が和した

雨となる　空の月かけ　はれ初めて　　　　幸成
　はや秋風の　なびく呉竹　　　　　　　種言
　旅衣　見にしむ袖や　かさぬらん　　　　秋江

（注　他書によれば、太山（トヤマ）は、外山（トヤマ）であり、里近い山の意
　村上元吉…慶長5年間関ケ原の合戦の折り、加藤嘉明留守の松前城を攻めるが敗れて討死、墓所　その他本書に詳しい）

⑤（P450）

雨そゝく　峯のよこ雲　引すてゝ　　　　加運
　風たえたえに　わたるかけはし　　　　吉智（村上吉智）
行く舟や　なきさをとお見　かようらん　　種貞
　はこふまし葉も　見えぬうな原　　　　種清
　　天正4年5月25日　　　　　万句第二　何物

＊①～⑤は第一回本願寺兵糧入れ直前＊

⑥（P446）

春はなお　人も心も　うかるらん　　　　吉久（村上神之助吉久）
　舟さし出てし　長閑なるころ　　　　　種守
　　天正11年7月8日　　　　　千句　　　何物

⑦

万治三年（1660）1月21日成久、重好、種景ら10人が何路百韻を奉納、瀬戸内水軍　絶えてひさしく、元禄2年（1689）の終末をさかの

ぼる、29年前のことである。】
＊以上一部ですが『種』を元に二神姓の人物を探し求めて見ます。
当然、二神宗家をはじめ、古い二神氏総べてに当たるべきですが、ここでは『玖珠二神氏系図』を拝借して参考と致します。

通範
├ 種尉－種言（法名 以春）
└ 種房－種吉

左記　種言は、前述②と④にあり没年、年齢が分かれば、年代に合わせて同一人物であるか、考える事が出来ると思います。
同じく③に種良とあります。句集には書役がいたとあり『吉を良』と書き違えたと考えるのは、それはこじつけと、一笑に付されるであろうか。
霧の彼方の二神水軍をのぞきみる『鍵の一つ』が水軍連歌にあるのではとの考えから、書き出してみました。しかし『十人十色』人それぞれ異なった見方があって当然であり、大方のご意見をお聞かせ下さい。
本書の冒頭にかえります。＊

序に言う。【昭和26年頃、大三島神社に伝わる連歌をみて
和歌森太郎先生、『君は、何故これを研究しないのか』
著者　『読めないのです…』
＊その読めないと答えた松岡氏が、昭和45年にこの本を発行しており、本書中の、積み上げられた古文書の写真（次頁）を、ご覧になればお分かりと思いますが、長年のその辛苦の程が偲ばれて、ただこうべを垂れるのみです。

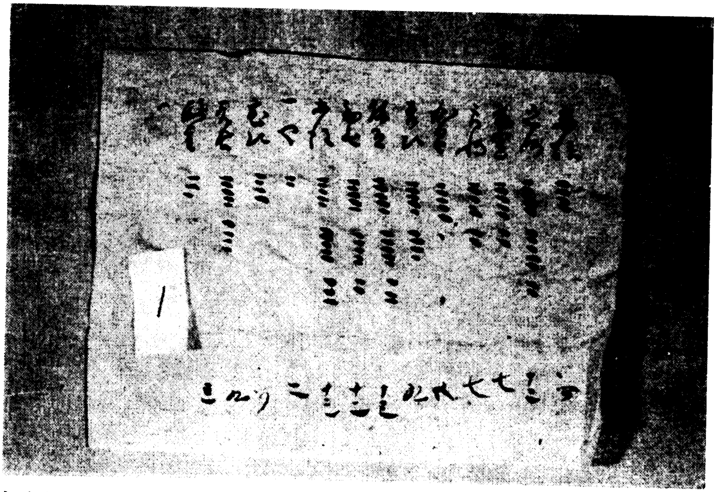
分をもわきまえず、

著者に捧ぐ　腰折れ　を　一首
繙けば　あらしのまへに　かおりたつ
三島ゆかりの　海武士のうた
（注　あらし…戦さの寓意とします）　＊

後記「海武士の歌」転載について

著者の　松岡進氏は、平成７年81才で亡くなられており、御息女節子氏に連絡致しております。

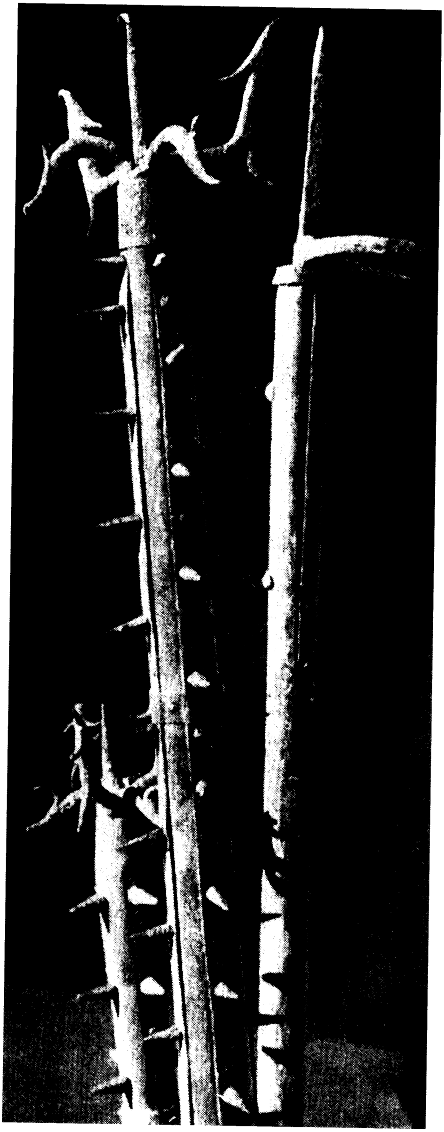
瀬戸内水軍が300年にわたり、執念にも以て、積み、そして積み重ねた三島宮大山祇神社連歌懐紙の山と句上表。



大山祇神社連歌の連衆寄合いの句上表。吉正、吉長等村上水軍武将たちの名が見える。写真の中の安任は、三島大祝越智安任である。

瀬戸内水軍奉納の三島宮大山祇神社法楽連歌懐紙の一部。

仝上つづき。沈黙して静かに置かれて数百年、しかし、水軍詩魂想念の水は，多くの懐紙の底で不断に流れ続けている。



「や が ら も が ら」

血を流すことを好まぬ水軍戦法精神を具現した重要武器の一つである。
(因島資料館蔵)

役員のつぶやき☆☆☆

還　暦　雑　感

副会長　二神　俊一

昭和20年生まれの私は今年の９月に満年齢で60歳となる。終戦が８月15日であるから、私は直接戦争は知らない。したがって、一応「戦後派」に分類されるのだろう。しかし、胎児として母親のお腹の中に居た時分は戦争中であったから、実態は「戦中・戦後派」位に分類するのが妥当なのかもしれない。

当時母親は小野小学校の教員（当時は小野村立小野国民学校と呼ばれていた）をしていた。学校への往復は徒歩で通っていたそうである。その途中で米軍の戦闘機の音がして、生きた心地がしなかったことなどをよく話してくれた。また畑中の自宅裏の畑に防空壕があったそうだ。ある灯火管制中の夜間、急にサイレンが鳴り渡りＢ29が襲来してきて母があわてて防空壕へ飛び込んだ時、ちょっと転んだとのこと。母がいうには、私の左耳たぶがちょっと変形しているのは、その時転んだことが原因であるかもしれないとのこと。これが本当だとすれば、私の唯一の（物理的な）戦争体験（胎児中）というか、後遺症であるといえる。

父親も教員をしていた関係（終戦時は南吉井国民学校在籍）で、幼少の頃から、久米小学校が焼夷弾でやられたとか、南吉井小学校が火災にあったとかいう話をよく聞かされた記憶がある。勿論当時は何処の学校にも防空壕を掘っていていざと云うときには避難していたそうである。南吉井小学校が火災に遭った時の事は相当大変だったのだろう、父母から度々そのことを聞かされた。丁度、夜間で、畑中の自宅からも南東の方角が真っ赤になっているのが見えて恐ろしかったそうである。父親は急いで自転車で駆けつけたとのこと。どのくらい被害

があったのかどうかまでは聞かされていなかったが、勤務先の学校が焼失するのは耐えられなかっただろうと想像できた。

私が産れる一ヶ月半くらい前の７月26日にはＢ29が沢山飛来してきて空襲で松山市が一夜にして焦土と化し避難民が小野村にも来たことなども後年語ってくれた。

８月15日の降伏の玉音放送はラジオはなかなか聞き取れなかったそうである。畑中部落にも当時はラジオを所有している家もそんなに多くなかったらしい。近所の人が我が家へ聴きにきて、皆で聞いたけど雑音がひどくて天皇陛下のお言葉は非常に判りにくかったと云っていた。

両親が教員をしていた関係で、私は３人の姉と祖母に面倒をみてもらっていたそうである。毎日、姉や祖母が交代で、乳飲み子の私を負ぶって小学校の小使い室へ連れて行き、母乳を飲ませてもらっていたそうだ。私は小使い室でお乳を飲んだりおむつを替えてもらって大きくなったんだろうな。

私が小学校に通い始めた頃、小使いさんが私をみて「二神先生の息子さんかな、大きくなって……当時は小使い室でおとなしく遊んでたよ……」なんて懐かしそうにいわれて、子供心にもなにか気恥ずかしかったのを覚えている。母親は昭和23年３月末に小野小学校を退任し、17年間の教職に区切りをつけ、その後は慣れない農業をし、戦後の食料不足に備えていたそうである。

このように私は幸か不幸か直接戦争体験が無い世代に産れたから、全て親や姉等から戦争にまつわる想い出を聞いたことでそれ以外は後年、学校の教科書で学んだことばかりである。

戦争中の大変さに加え、戦後の復興時期も食べるのに一生懸命であった。子供心にはなかなか理解できないものであったが、それでも戦後の誰もが貧しい状態で物を大切にしないといけないことなどは自然と身に付いてきたものである。

遊びにしても、当時は遊び道具などまともな物は無かったから、近

所の友達と小川や田圃で自然を相手に遊び回っていた。夏は川でフナやドジョウを捕ったり、家の前の小川ではシジミ貝を採った。小野川の周辺にはイタドリや野苺が沢山あり、美味しいと思った。家の近くに素鵞神社があり、境内には榎木や椋の大木があり実を食べたりして美味しいと感じた。最近の人は野山の実にはあまり見向きもしないが、「アケビ」の実などはこんな美味しい物があるのかと思った。いずれも昔懐かしい味である。

さて、終戦から60年経ち、同級生から、還暦を迎えて徳島の「薬王寺」へ厄落としに行こうと云う話が持ち上がり、今年１月中旬に愛媛県内在住者だけでなく関東・関西在住者も帰省して参加し、総勢30余名の日帰りバスツアーが挙行された。久しぶりに集まった同級生が旧交を温めながら一路徳島へ向かった。私自身は「薬王寺」は初めてだった。全員が神妙な面持ちで護摩祈祷を受け、無事厄落としをしてきた。一口に戦後60年といってもいろんな激動の人生であったが、また気持ちを新たにして人生の第４コーナー（？）を疾走したいものである。

平成17年５月21日　記す

（母　千代子（中央）：91才の頃）

「つれづれなる事、折の句に込めて」

理事　二神　重則

ふ　不意に起こった
た　大病の床で
が　過去と未来の
み　身の上を

温泉などへ行くと、暇なジイさんなどの自慢話の中に「病気自慢」と言うのに出会う事があります。「ワシャのぉ、ここを＊＊針も縫うたんじゃがぁ……」「儂もよ、見てみい、ワシの方が多かろがぁ　＊＊針じゃ……」

既にご存じの事とは思いますが、我等が会長も先日入院手術を受けました。聞くこところに寄ると、お腹の左右を糊で貼ったとか……。私の場合は、胸の左右をタッカー（大工さんが使う大きなホチキスの様なもの）でバンバン留めていた。だから二人とも、ブラックジャックの様な手術の跡がありません。「自慢できない、残念ー!!」

成人して初めての入院は、10年前の松山赤十字病院でした。病名を聞いて驚き心配しましたが、病状は頭痛だけで後遺症もなく入院も短期で終わりました。その時、松山市は歴史に残る大渇水で20時間以上の断水がありました。未だに、そのころの飲屋街の混乱を話題にすることがあります。松山日赤は病院に井戸があり、なんとシャワーが使えました。「ラッキー」

２度目は大阪行きの船の中で心筋梗塞を起こし、港のタクシーに乗って神戸中央市民病院に転がり込みました。良い病院でした。病室は高い階で、朝な夕なの金波銀波の中を出入りする船と、六甲のもと夕暮れが近づくと家々にともる灯、そして観覧車。神戸の街がよく見えました。「ラッキー」

３度目は、大都会東京新宿の高層ビル群の一角、最新の手術を受けました。都庁を横に大都市を睥睨し、西に夕焼けの富士を見ました。皆さん優しくて、担当の看護師さんの関東言葉も新鮮でした。続けて「ラッキー」

入院中は
ひ　病名も
ま　街も揃って
だ　大層に

疑問「次は、どうなる？」
結論「最大の都市東京の次は無い。どうも、最後の入院らしい。」
「ラッキー……？」

関係者からは血管の病気は生活習慣病とか言われて、日頃の生活態度が悪かったらしい。そんなに悪い生活をしていたとも思えず、納得していないのですが仕方がありません。これからはストレスのない生き方を目指します。

会員の皆様には入院などのゴタゴタで会報が何度か遅れてしまいました。申し訳なく思っています。今は、私はＮＰＯの活動に時間を潰しています。何度か運良く生きながらえて来ました。これもご先祖や皆様の支えがあっての事と感謝して、少しでもお返しできればと思っています。有り難うございました。

し　死なず生かされ
げ　結構な事と
の　残り悠々
り　リラックス

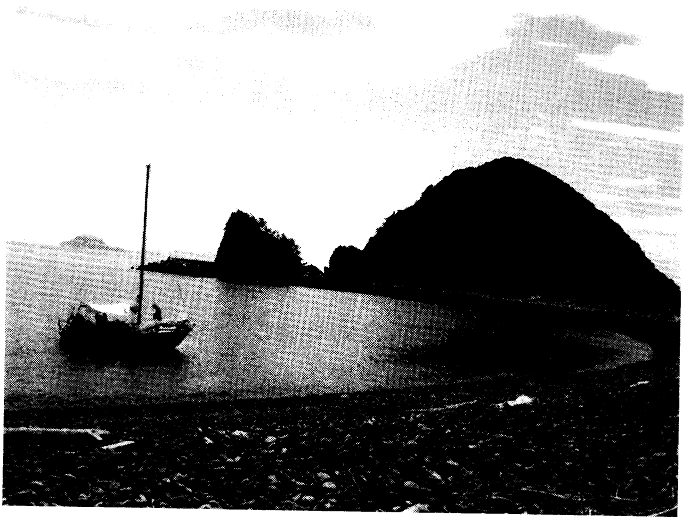
由利島への想いから

豊田　　渉

二神島について考えるとき、由利島の存在を抜きにしては語れない。由利島は、はるかな昔から、二神島の属島として重要な役割を果たしてきたと思うのである。

１つには、漁業権のこと。12海里や200海里ほどの規模ではないにしても、何らかの利権争いがあったと考えてもいいのではないだろうか。それは、江戸時代に今の愛媛県越智郡岩城島や紀州をはじめとする多方面から、由利島の周辺で操業をしたいということで願い出ており、許可していることで伺える。

地図で確認していただければお解かりになると思うが、二神島の属島としては由利島をはじめとし、小市島、※中島、横島、鴨背島とあり、その海域は広範囲になる。だから、なおさら由利島の存在が重要になると思うのである。（※：「なかしま」と読み、旧中島町の核島であった中島（なかじま）のことではない。）



余談だが、横島は丸ごと個人所有地、それ以外は二神漁協（現在は、中島三和漁協二神支所）の所有である。由利島はその中で約半分が数十人名義の所有である。鴨背島は、第二次大

戦中、松山航空隊の飛行機が標的にして射撃訓練をしていた。戦後60年の今でも、島の岩肌には弾の跡が見られる。

別の時期には、二神島の北にある二子島（上二子島と下二子島の２つあり）についても、津和地島や怒和島とで諍いがあり、最終的には３分割されている。文化５年（1808）伊能忠敬が測量に来る前に作図されていた、怒和島に残る「怒和島図」には、この二子島がきちんと描かれており、位置や怒和島からの距離は、現在の地図とほとんど変わらない正確さである。

長崎市の県立美術博物館が保管している江戸時代に描かれたと思われる「瀬戸内海図屛風」には、周囲の島よりも大きな文字で「ゆり」と描かれている。伊予灘にぽっかりと浮かんだ由利島。行き来する船にとっては、何かしらの存在感があったに違いないと感じる。

江戸時代以前の由利島について書かれた文献類は残念ながら、今のところ存在してはいない。物としては、由利島の港（かつては池であったが、旧日本海軍が切り開いて港に変えた）から、弥生時代中期の土器が、大由利の中腹からは奈良・平安期の壺等が発見されていることくらいである。弥生時代頃には人がいたということであろう。江戸期には無人島であったようで、人がいたりいなかったりを繰り返してきたようだ。

由利島の権利を主張することは、広い海域を確保できると共に豊かな魚介類を手に入れることができたのであろう。

これは私の仮説だが、この由利島の権利をいち早く主張するため、由利島が沈んだという話しを広め、記録として残し、物語までも作って、「由利島はきれいでいい所だけど、沈んだり、怖い話があったりするところなんだよ」ということで、けん制していたのではないかと考えるのはどうだろうか。周囲に点在する情島・水無瀬島にも沈んだという話が伝っているのも妙である。安永期前後を生きた二神種章は、代々伝わってきた文書類を整理し、由利島に矢立明神社を創建（安永４年：1775）して、由利島は二神島のものだというアピールをしたの

では。

由利島が沈んだということに関して、島の形が大きく変わり、大きく感じたり小さくなったように思えるというのは、ありえるかもしれない。最近、由利島に上陸したとき、海岸線が大きく変わり、石が大きく動いて全体の形が、昨年よりは随分と違っていた。台風などの風と波による仕業だと思う。以前に比べ、１ｍくらい石が覆いかぶさり嵩が高くなっていた。それは、以前から海岸べりにあった、高さ２ｍくらいのコンクリート製構造物の半分くらいまで石の層がかぶさり、構造物の高さが半分ほどの１ｍくらいになっていたからだ。由利島が沈んだかどうかはともかくとして、これを見て、波や風の強大な力によって島の形が変わるというのは、ありうることではないかと感じた次第である。

あっちへいったり、こっちへ走ったり、由利島に関しての、とりとめのないことを思いつくままに書かせていただいた。でも、そんな中から新たな何かが見つけられるかもしれない。これ以外にもあるけれどもいずれまた。

今年の夏、私はまた由利島へ出向く。行くことができるまで、これからもずっと。

「ふたがみ」にまつわる話

むかし話し　由利千軒ゆり込んだ

編　集　部

二神島の南にある由利島は、今はもう住む人もいません。けれども昔この島には千軒もの家があり、半農半漁の生活をして、平和に暮らしていたということでした。

この島は今よりずっと大きくて、お寺もあれば、氏神様をまつるお宮もありました。日差しも明るく、まるで、極楽のようにのどかな島であったそうです。いつごろのことかわかりませんが、あるとき、このあたりに大地震がおこりました。すさまじい音と共に、千軒もの家が地の底へめり込み、海水がどっと押し寄せてきました。住んでいた人々は、ほとんど家といっしょに地底に埋もれたり、海へ流されたりしました。この大地震で島は見る影も無くなり、わずか十分の一の面積が小さな２つの島になって残っただけということです。

今でも、寺床や長者屋敷と呼ばれる場所がありますが、それらの場所と言われるところは、ただ、おにゆりの花がひっそりと咲いているだけで、昔の盛んな様子を偲ぶことはできません。

波の静かなときには海の中に、昔の井戸や石積みの跡が見えるとも言われます。晴れた月夜には、物悲しげな笛の音が、海の底から聞こえてくるとも言われています。

そのとき、わずかに生き残った数人の島人たちが、お寺のご本尊を守った和尚さんを助けて、命からがらに逃げ、はるか向かい側の三津に住み着いたと言われています。

古三津にある儀光寺というお寺には、由利島の大地震のときに助かった人々が、お遷ししたご本尊をおまつりしてあることを、はっきり

と書いた文書があるということです。
　大地震のために一晩で「ゆりこんだ島」、そのときから、この島を由利島と呼ぶようになったそうです。
　また、この伝説は、大由利と小由利の間が、砂洲で結ばれているために、結島（ゆいじま）と呼ばれていたのが、いつの間にかゆり島になって地震の話が生まれたとも言われています。
　本当のことは謎のまま。でも、それでいいのかもしれませんね。

参考：「中島のむかし話し」より

大由利（左）　　小由利（右）

二神島の近況

平成17年8月発信
豊田　　渉

二神島の住所の表記が変更

住所表記が平成17年1月1日から「愛媛県温泉郡中島町二神〇〇番地」が「愛媛県松山市二神〇〇番地」に変更になりました。

郵便番号は「791－4323」で変わらず。大抵は、これを書いていれば届きます。

「二神氏発祥の地」パネルの設置計画

17年度の定期総会において、今年度の事業の1つとして、二神島に「二神氏発祥の地」のパネルを設置することとなりました。

会員の皆様をはじめ、趣旨に賛同していただく方々の寄付をお願いすることになりますが、ご協力をお願いいたします。

育ってね「館の椿」

豊田町からいただいた館の椿を二神島の安養寺に植えたのは5年前。現在、伸び盛り？。「あれっ、枯れたのじゃなかったのかなー。」いえいえ、その後、新たに送っていただいて育っています。今度はうまく育ちますようにと祈りながら、寺総代さんたちが見守っています。

島を訪ねたときはお立ちよりください。

閑話３題

中部・関西支部理事　二神宏介

キーワードは「ふたがみ」
終戦60周年記念特集に関して

閑話その１　一件落着

私の近所の奥様が一昨年「沙羅の花」「特攻」沖縄の海に散るという御本を出版されました。鹿児島知覧特攻平和記念館に兄上様（中島秀彦氏陸軍特攻百四十四振武隊第４剱隊長陸軍大尉）が祀られており、知覧に二神さんも祀られているよ、関係者ですか？と聞かれました。第８号に二神孝満氏の記事が掲載されるらしい。早速連絡しよう!!

閑話その２　尋ね人

息子の嫁の実家から連絡で、親父の戦地から帰還にまつわる書類を整理していたら、その中から独立歩兵第百二十九大隊（支那派遣軍）の名簿が出てきたそうです。二神進吉さんの名前がありますが、系譜研究会に関係ある方ですか？と問い合わせがありました。その時の住所は東京都江戸川区東小松川３丁目3628になっているそうです。
心当たりのある方、事務局までご連絡ください。

閑話その３　細いほそ〜い「縁」

先日従兄弟の３回忌法要で集まった席で、法要前、浄土真宗の住職と雑談を交わしていたとき、今度北海道へ行くとの事で、弟（敏郎）が「お好み焼き風月」に寄ってくださいと、名刺を差し出したところ、うちの檀家さんにも二神さんがいてますよ、新高の方ですが、で話が終わり、帰宅後、関西支部の名簿を見たら二神忠昭さんと思われます。住職を通じ細いほそ〜い「縁」もあるみたいですね!!

「第４回二神系譜研究会関西・中部支部集いの会ご案内」

Ⅰ　日　時　平成17年11月19日(土)　受け付け　午後2:45～3:00
◎観光希望の方、昼食お済ませの上（11時50分迄にご参集下さい）
奈良観光ボランティアガイドによる、観光客のあまり知らない古都散策（元興寺（天平の甍、世界遺産）奈良町、庚申堂、新薬師寺、頭塔等）

Ⅱ　場　所　「ウェル飛火野荘」(研修室)
〒630－8301　奈良県奈良市高畑町778番１(電話0742－22－2857)
ＪＲ奈良、近鉄奈良市内循環外回り
バス停（破右）下車すぐ前（バス約10分）

Ⅲ　会費
日帰りの方　　懇親会費（諸経費含む）として￥6,000円
宿泊希望の方　懇親会費（宿泊代諸経費含む）として￥12,000円

Ⅳ　行事内容　11月19日(土)　関西・中部支部会会員の集い
1　会長挨拶
2　特別講演○○○○のお話（約40分）
3　講演（約30分）
4　ビデオ鑑賞　豊田渉氏作　「豊田町訪問」仮題（約30分）
5　中部・関西支部会（総括　二神栄三理事挨拶）
二神英臣本部事務局長による「二神系譜研究会」５年の歩、及び現況説明、質疑応答（ご意見、ご提言お待ちしています）
6　自己紹介　終了後、食事会会場にて懇親会　20時頃解散

参加ご希望者は同封のはがきを９月24日(土)迄に投函お願いします。
また宿泊ご希望者はホテルの手配をしています。(ご夫婦用３室、10畳２室)

共催　松山本部常任理事会一同
共催　中部・関西支部理事一同

お問い合わせ、連絡先　◎二神栄三　TEL0742－47－9620
二神宏介　TEL06－6683－5224

以上

編集後記 I

戦後60年のこの12月、映画「男たちのＹＡＭＡＴＯ」が封切られます。この「ＹＡＭＡＴＯ」とは、かの戦艦大和のことです。尾道市向島では、映画での撮影に使用した実物大の戦艦大和のオープンセットが、７月17日から来年の３月末まで公開されます。また、今年４月23日には広島県呉市に「大和ミュージアム」が開館しています。

戦艦大和と二神島もあながち無縁ではないようで、昭和20年３月28日呉軍港を出航した大和は北上して江田島の西を南下。中島西端のクダコ水道を通過し、小市島の東を抜け、二神島の南を西進し徳山方面へ航行しているようです。中島のクダコ水道を通過するとき、数人の少年たちが手を振る姿が確認できたという乗組員生存者からの証言もあります。3000人近い戦死者のうち愛媛県出身者は17人。その中の１人は、少年たちが手を振ってくれた場所（中島宇和間地区）出身の軍属土屋額男さんでした。戦死者名簿の中に「二神」姓は、ありませんでした。

さて、第８号をお届けします。皆様のご協力によりボリュームのあるものになったと思います。ありがとうございました。(豊田涉)

平成12年（５年前）豊田町訪問時

編集後記Ⅱ

ある日の編集会議で「重則」常任理事から「多忙を極め、暫く編集に携われない」と申し出があった。一瞬誰もが「困った」が、今回はデッドラインも決まっているから、これ以上後ろへ延ばすことは出来ない。

「よっしゃ！引き受けましょう」とは云ったものの、私もまだ株主総会も乗り切らなければならないなど、公私共に忙しい時期ではあった。しかし、会長はじめ編集長や事務局長の活躍により、なんとかゴールが見えてきた。今回は理事の方の精力的な執筆により歴史的にも極めて貴重な資料の集大成となる「特集号」が出来たものと関係者のご努力に敬意を表したい。

今回は「終戦60年」と「豊田氏慰霊５年祭」の二つの特集を組み込んだお陰で原稿も沢山集まり、ボリュームも過去最高ではないでしょうか。

馴染みの印刷会社「平和印刷工業」の中社長には随分お手数おかけしたように思います。

終戦記念日までに会員の皆様のお手元にお届けできる目処がたちほっとしています。

今後一層会員相互の交流が深まることを期待して

平成17年７月10日

二神俊一

海の民 ふたがみ　第8号　正誤表

1頁　目次　10～15行

[正]

～戦死・戦没者を偲ぶ
「吉木二神家と第二次世界大戦」　二神　弘　43
「菊間河之内集落と叔父辰雄の想い出」　二神昌生　51
～苦難の引き揚げとその後
「牡丹江の二神一族顛末記」　二神照夫　54
「亡き父の故郷探訪、私の戦中、戦後の放浪記」　二神末次三　58

[誤]

～戦死・戦没者を偲ぶ
「吉木二神家と第二次世界大戦」　二神　弘　43
～苦難の引き揚げとその後
「牡丹江の二神一族顛末記」　二神照夫　51
「亡き父の故郷探訪、私の戦中、戦後の放浪記」　二神末次三　55
「菊間河之内集落と叔父辰雄の想い出」　二神昌生　63

頁	行	正	誤
1	28	折り句	折の句
5	2	(99.17アール)	(109m)
12	13	(99.17アール)	(109m)
12	21	(99.17アール)	(109m)
19	22	袖	祖
27	16	人工	人口
28	18	欄	蘭
35	24	愛媛県立	県愛媛立
42	3	37歳	36歳
43	17	高等	高校
48	14	夫人	婦人
61	1	文字を小さく	
79	14	暖かく	暖たかく
86	17	言えない	癒えない
93	16	所謂	謂る
94	3	閑話	関話
103	1	折り句	折の句
119	4	折から	織から
120	6	〒790-0905松山市樽味	〒790-0965松山市樽味町